文化戦線における大革命

外文出版社
北京

文化戦線における大革命

外文出版社
北京

目次

現代もの京劇競演大会における演説……彭　真……5
（一九六四年七月一日）
社会主義の演劇を大々的に発展させ、繁栄させて
社会主義の経済的土台によりよく奉仕させよう……柯慶施……28
現代もの京劇競演大会開幕式でのあいさつ……陸定一……91
（一九六四年六月五日）
文化戦線における大革命……100
（一九六四年第十二号『紅旗』誌社説）
京劇芸術発展の新段階……112
（一九六四年六月六日付『人民日報』社説）
文芸戦線における社会主義革命を最後までおしすすめよう……121
（一九六四年八月一日付『人民日報』社説）

現代もの京劇競演大会における演説

（一九六四年七月一日）

彭　真

同志のみなさん、友人のみなさん

まず最初に、わたしはこのたびの京劇改革の勝利と京劇の革命的な現代もの上演の勝利にお祝いを申しあげます。

現代ものにもいろいろあります。ハリウッドで上演しているものも「現代もの」ですし、現代修正主義者の上演しているガラクタも「現代もの」です。しかし、われわれの上演するのは革命的な現代ものです。

過去、京劇の多くの出しものはもっぱら帝王将相、才子佳人、おえらかた・奥方、若様・お姫様などを演じ、搾取階級を美化し、勤労人民を戯画化してきました。そして革命的な現代ものはほんのわずかで、ごくたまにしか上演されませんでした。京劇は過去長いあいだおもに封建主義と資本主義に奉仕してきたのです。京劇の改革は、これまで何度も試みられ、改革に成功したも

のもありましたが、このたびの現代もの京劇競演大会のようにこんなにも全面的で、系統的で、豊富な内容をもち、広はんな大衆に歓迎された改革はやはりはじめてであります。これは京劇の革命です。

こんにち、京劇を研究するには二つの面から見なければなりません。内容からいえば、これまでのひじょうに多くの出しものは封建主義、資本主義に奉仕してきたものであり、これらの出しものが支配的な地位を占めていましたので、どうしても改革しないわけにはゆきません。また内容の比較的よい歴史劇や現代劇もごく少数ありますが、それらにもひきつづき手を加えてゆく必要があります。芸術形式からいえば、京劇は比較的長い歴史をもち、芸術的水準がわりに高く、型のわりに厳格な劇に属しており、改革するにはかなりの困難がありますが、うまく改革すれば、またひじょうに前途有望なものです。現在、こんなにも多くの同志、友人のみなさんが京劇を改革し、革命をおこす決意をかためられており、またその革命の結果、偉大な成果をあげられたことから、このたびの革命は勝利したものと判断することができます。過去おもに封建主義、資本主義に奉仕してきた芸術である京劇を、労農兵に奉仕し、社会主義に奉仕する芸術に改革するということは、文芸界における大きなできごとであり、大きな革命であります。この革命は、現在すでに初歩的な勝利をおさめました。われわれはこんどの改革の勝利を祝うとともに、みなさんに心から感謝の意を表します。

今後の問題は、京劇の革命をどのように最後までおしすすめ、どのように京劇をりっぱに改革してゆくかということです。

京劇を改革すべきかどうか、京劇をどのように系統的に、全面的に改革したらよいかという問題については、まだかなり多くのちがった意見があります。圧倒的多数の意見は誠意のある、建設的なものです。しかし、改革にまったく不賛成な意見もごくいちぶにあります。こうした人びとは、「これでも京劇といえるのか、水袖もなければ、あごひげもなくなってしまった。まったくむちゃだ」などと言っています。ですから、問題はまだまだ少なからず存在しているのです。同志のみなさん、このように一回の競演大会で、問題がすべて解決し、革命が完全に成功したなどと考えてはなりません。事実、そんなことはありえないのです。ですから、いくつかの問題について、やはりお話しして、みなさんと相談してみる必要があると思います。

一

第一の問題、京劇を改革する必要があるかどうか、またどのように改革するか。

改革はどうしても必要であり、それもりっぱに改革しなければなりません。これについて五つ

の面からお話しして見ましょう。

一、社会主義に奉仕するか、それとも封建主義、資本主義に奉仕するか。文芸は政治に奉仕し、生産力の発展に奉仕しなければなりません。こんにちのわれわれの社会は社会主義社会です。それでは、われわれの京劇はだれに奉仕するべきでしょうか。またどのような出しものを演ずるべきでしょうか。社会主義革命と社会主義建設に有利な出しものを演じて社会主義に奉仕するか、それとも封建主義、資本主義に有利な出しものを演ずるか。これは根本的な問題です。問題はたいへんはっきりしています。もし封建主義、資本主義を復活させようと考えているのでなければ、あるいはまたそれに未練をもっているのでなければ、どうして社会主義社会において、いつまでも帝王将相、才子佳人などといった搾取階級の代表的人物の出しものばかりを演ずることができるでしょう。皇帝とは何でしょうか。皇帝とは地主階級の代表であり、地主の親玉です。皇后とは何でしょうか。地主の女房の親玉です。もちろん、これまで、京劇も少しは勤労人民を演じてきました。だが、その大部分は歪曲され、戯画化されたものでした。われわれの社会主義社会において、演劇の重要な一種目であり、芸術水準のわりに高い、われわれの芸術上の重要な遺産である京劇が、いつまでも帝王将相のようなもの、社会主義革命と社会主義建設に不利なものを上演していくのをどうして許しておけるでしょうか。それはいけません。そんなことをすれば、客観的には封建勢力の封建主義復活の活動を助け、資本主義勢力の資本主義復活の活動を助けることになります。ですから、京劇はかならず改革しなければなりません。京劇は、ほろびるか、それともおもに労農兵を演じ、労農兵に奉仕し、社会主義に奉仕するか、この二つの道の一つをえらばなければなりません。第三の道はないのです。

二、多数の人に奉仕するか、それとも少数の人に奉仕するか。京劇は労農兵（革命的な知識人を含む）に奉仕するのでしょうか、それとも旧社会の「老若遺臣」に奉仕し、地主、富農、反革命分子、悪質分子、右派分子に奉仕するのでしょうか。九〇何パーセントの人びとに奉仕するのでしょうか、それともわずか何パーセントかの人びとに奉仕するのでしょうか。六億何千万の人びとに奉仕するのでしょうか、それとも全国人口の何パーセントかしか占めない数百万、数千万の人に奉仕するのでしょうか。過去、舞台を支配していたのはつねにこの何パーセントかの人びとでした。こんにち、われわれの国はプロレタリアートが指導し、労農同盟を基礎とする中華人民共和国であります。このような国において、われわれの文芸工作者、社会主義国の文芸工作者、京劇芸術戦線における戦士はいったいどちらの側に立つべきでしょうか。九〇何パーセントの人びとの側に立ち、労農兵の側に立ち、つまり社会主義の側に立つべきでしょうか、それともわれわれの敵である地主、富農、反革命分子、悪質分子、右派分子の側に立つべきでしょうか。

ここにおられるみなさんのなかに、相手側に立とうと思っている人が絶対にいないとはいえませんが、しかし圧倒的多数の人はやはり地主、富農、反革命分子、悪質分子、右派分子の側に立つことを願っていないとわたしは見ています。

労農兵大衆、とりわけ広はんな青年は、京劇が帝王将相ばかりを演じて、革命的な現代ものを演じないことに不満をもち、早くからハッキリした態度を示しています。その示し方はきわめて簡単で、京劇のキップを買わないことです。ふるい京劇の入場率がいちぶの地方劇よりよくないのは、こうした地方劇では革命的な現代ものを演じていたからです。帝王将相、才子佳人を演じていたふるい京劇の劇場はいつもガランとしていました。京劇の芸術水準はわりに高いはずではなかったでしょうか。全国的に有名な俳優がいるはずではなかったでしょうか。ひじょうに高い芸術的修養があるはずではなかったでしょうか。ところがキップの売れ行きはいちぶの地方劇にもおよばないのです。これはどうしたことでしょうか。それは、ほかでもなく、大衆が自分の行動で京劇は改革しなければならない、改革しないなら見ないと、われわれに告げているのです。あんなに多くの大衆が見にいかず、あんなに多くの青年が見にいかず、ただ少数の五、六十代の人といちぶの京劇ファンが見にいくだけです。このままでゆけば、二十年でほろびなければ四十年で、四十年でほろびなければ六十年で、京劇は大方ほろびてしまうでしょう。労働者、農民大

衆、青年がみな態度を明らかにしているのにまだ改革をやらず、帝王将相、才子佳人ばかりを演ずるのであれば、それはみすみす京劇を自滅させることになります。さらにいってみれば、われわれの劇が人民大衆に奉仕するものでありながら、人民大衆が見ようとしない、それでもまだ改革しないで、いったいなにを待っているのでしょうか。京劇はどうしても改革しなければなりません、改革しなければ活路はないと思います。

三、死んだ人間を演ずるのか、それとも生きている人間を演ずるのか。京劇では生きている人間を演ずることはまれです。それに、こういった議論があります。京劇が生きている人間を演ずると、すこしも似ていない、あるいは似ているように演ずるのは並みたいていなことではない、ところが死んだ人間を演ずると、時代が現在から遠ざかれば遠ざかるほど、ますますそっくりに演ずることができるというのです。これはひじょうにおかしいことです。《覇王別姫》を演ずるとします。いったいあなたは覇王（項羽）を見たことがあるのでしょうか、それとも虞姫を見たことがあるのでしょうか。どうしてそっくりだということがわかるのでしょう。ふるい時代の人物を演ずればまったくそっくりだというのですが、どっちみちあなたも本人を見たことがないのだし、われわれも見たことがないのですから、あなたが「そっくり」だというなら「そっくり」にしておきましょう。ただ、どうして京劇が労農兵を演ずれば似ていないときめつけるのでしょう

か。現代人を演ずるには少なくともモデルがあります。労働者、農民、兵士がそれです。どこか似ていないところがあれば、もう一度見にいき、学びさえすれば、似たようにする可能性がいつでもあるのです。京劇が生きている人間を演ずれば似ておらず、死んだ人間を演じてこそ、はじめて似たものになるという、京劇改革反対のこのような理由は成り立ちません。

六億何千万という労働者・農民大衆（革命的な兵士、つまり銃をもった労働者、農民を含めて）の偉大な革命闘争、このように史上かつて見なかった偉大な革命運動、このように雄大な建設事業、これでもまだ、演ずる価値がないというのでしょうか。これでもまだなん人かの死んだ人間こそ演ずる価値があるというのでしょうか。こんなにも多くの感動的で英雄的な事績、こんなにも多くの英雄的人物、こうしたものを演じないで、いつまでも封建主義の死んだ人間ばかりを演じようというのです。われわれの革命的な英雄的人物、勇敢な革命的大衆、これらが反映するにあたいしないとでもいうのでしょうか。描写するにあたいしないとでもいうのでしょうか。作品に書きあらわし、舞台にのせ、楽譜にあらわし、絵画の題材とするのにあたいしないとでもいうのでしょうか。偉大な社会主義革命と社会主義建設の事業に興味をもたず、かえって誰も見たことのない、とっくの昔に死んでしまったふるい時代のたったなん人かの人物——地主の親玉、地主の女房の親玉、あるいは封建的、資本主義的な「才子佳人」にそんなにも興味をもっていると

いうのは、なんとおかしいことでしょう。しかし実際にはなにもおかしいことはないのです。これは、九〇何パーセントの人びとに奉仕するか、それとも何パーセントかの人びとに奉仕するかという問題、つまり社会主義に奉仕するか、それとも資本主義、封建主義に奉仕するかという問題にかかわっています。いまでも、資本主義、封建主義を復活させようと考えている人がいるのはたしかです。しかし、それはなんといっても少数です。社会主義の中華人民共和国において、封建主義、資本主義に奉仕することを公然と提唱するのはひじょうに困難なことです。なぜなら、たちまち人民大衆から手痛い打撃をうけるからです。そんなに大胆な人間がそうたくさんいるとは思えません。そこで下心のある人は手を変えて、ふるい時代の人物ばかりを演ずるのです。また、新劇にたずさわったことのある人で、こういっている人も二、三います。見てごらんなさい、わたしの演じたのはブルジョアジーですが、それは十八世紀、十九世紀の死んだブルジョアジーです。わたしの演じたのは封建主義の人物ですが、それは死んでからもうずいぶんたった封建主義の人物です、と。きわめて少数の人は、このような封建主義、資本主義によってわれわれ人民の精神をむしばみ、われわれの青年を毒しようとしています。実は客観的には、このような結果になるのです。もちろん、こうした出しものを演ずる大多数の人は無意識的にやっています。なぜなら、もともと科班（コーパン）（旧中国の俳優養成所＝訳注）で、あるいは師匠について劇を学

んださい、学んだものがこうした劇だったのですから、いまたとえ心のなかでは演じたくなくても、ほかのものを演ずることができないのです。しかし、きわめて少数の人についていえば、その人たちが少しも意識していなかったのだなどということには、わたしは疑問があります。もしかれが意識していなかったのだとすれば、どうして京劇改革をこんなに敵視するのでしょうか。われわれには「社会主義はすばらしい」という歌があるではないでしょうか。かれらは、そうではない、「封建主義はすばらしい」「資本主義はすばらしい」と言っているのです。そしてそれを芸術的な形式で表現しているのです。ごらんなさい、舞台の上での封建主義、資本主義はなんとすてきでしょう、と。かれがうたおうとするのはそうした歌なのです。だから死んだ人間を演ずるか、生きている人間を演ずるかという問題は、簡単に死んだ人間とか、生きている人間とかという問題ではないのです。これは政治的な問題であって、階級性を反映し、政治的方向を反映し、すすむ道を反映する問題です。こういう言いかたはあやまっているでしょうか。いちぶの人は外人、ふるい時代の人物の劇を演ずるのをこのんでいます。レーニンも外人であり、ふるい時代の人物なのに、どうしてレーニンが十月革命を指導したことをテーマにした劇やその他プロレタリア革命をとりあげたすぐれた外国の劇が少ししか上演されないのでしょうか。

われわれは史的唯物論者ですから、けっして十把ひとからげに歴史劇の上演に反対するもので

はありません。われわれが死んだ人間を演ずることに反対だというのは、封建主義を鼓吹し、資本主義を鼓吹し、搾取階級を美化するような死んだ人間を演ずることに反対だということです。勤労人民の志気をあげ、搾取階級の威風をなくし、人民の事業に有利であり、社会の発展に有利であり、革命に有利であり、社会主義に有利であるような歴史劇、中国人民のすぐれた伝統を代表するような歴史劇は、もちろん上演することができます。しかし、問題は、重点を革命的な現代ものの上演におき、闘争している人民大衆のなかの生きている人びとを演ずることにおき、闘争しているプロレタリアートのなかの生きている人びとを演ずることにおくべきだということです。二年前、わたしは北京市人民芸術劇院の同志のみなさんに、あなたがたは何パーセントかの時間で死んだ人間や外人を演じ、九〇何パーセントの時間で中国の革命的な現代ものを上演したらどうでしょう、ひとつ考えてみて下さい、と提案したことがあります。わたしは、歴史劇を一概に上演するなというのではありません。重点を生きている人間を演ずることに、労農兵を演ずることに、社会主義に有利で、敵との闘争に有利である現代ものを上演することにおくべきだというのです。

京劇界のある人は、革命的な現代ものの上演は一陣の風のようなものだといっています。われわれは、こんどの風がひじょうに大きく、吹きだせばやまないものであるとその人にいうことが

できます。中国で資本主義が復活しないかぎり、現代修正主義者が国家の支配者にならないかぎり、この風は絶対にすぎ去りません。京劇界の同志のみなさん、友人のみなさん、わたしは、あなたがたがここしばらく、ふるい時代の人物の出しものから手をひき、全力をあげて現代ものというこの関所を突破するのがより妥当だと思います。あなたがたは長年そのような出しものをやってきたので習慣になってしまい、自由自在に演ずることができますが、現代ものを上演するとなると手も足もでなくなり、ひじょうに困難を感じるのです。問題は、まだそのコツをつかんでおらず、まだなれていないということにあり、なれてしまえばいいわけです。思い切ってしばらくの間やってみて、現代の革命的な出しものが自由自在に演じられるようになれば、そのとき、また同時にいちぶのふるい時代の人物の出しものを演ずるのもよいでしょう。わたしのみたところ、しばらくの間このようにしなければ、革命的な現代ものをしっかりしたものにすることはできないと思います。

四、内容と形式の問題。京劇の内容が革命的な思想をそなえたものでなければならないこと、これはすでにお話ししたとおりです。けれども、革命的な内容は京劇特有の芸術的風格と統一されなければなりません。改革のむずかしさもここにあります。京劇特有の芸術的風格は、ふるい時代を演ずる方ではすでにそれなりのものができあがっていますが、現代の労農兵を演ずる方では

はまだまとまったものができておりません。こんどすこしばかり創造しましたが、まだほんの初歩的な経験をえた程度なので、こんごひきつづき経験をまとめ、創造をおこない、改革をすすめる必要があります。

革命的な内容と京劇特有の芸術的風格を統一するには、二つの問題があります。一つは京劇の型を改革する必要があるかどうかということです。京劇の型はもともとふるい時代の人物を演ずるためのものでした。それがいまはおもに現代の人物、労農兵を演じなければならないのですから、どうしても改革する必要があります。音楽、うた、せりふ、しぐさ、立ちまわりなど、すべて改革しなければなりません。もしもこの改革をこばむなら、労働者、農民、兵士を十分に反映することはできません。

もうひとつの問題は、他の芸術の長所をとり入れる必要があるかどうかということです。京劇はもともと他の劇の長所をとり入れてつくり出され、発展してきたものです。もともと、こうして一流派をなしてきたものなのです。ところが、現在なぜ長所を学び、とり入れることをしなくなったのでしょうか。やはり、長所はとり入れるべきであります。もちろん、とり入れたのちも、あいかわらず統一された京劇としての芸術的風格は保っていなければなりません。いいかえると、京劇はやはり京劇であって、「ヌエ」のようなものになってはならないのです。たとえ

ば、人がものをたべるのに、栄養のあるものでさえあれば、なにをたべてもよいし、たべたあとは、消化して、自分の血や肉や骨にしてしまいます。もしも京劇を改革した結果、京劇ファンによろこばれないようなら、われわれの改革が成功したということはできないでしょう。

五、戦略的にはべっ視し、戦術的には重視するという問題について。戦略的にべっ視するということは、つまりわれわれが京劇はかならずりっぱに改革できると信じること、京劇の改革に反対する連中をべっ視しなければならないということです。いちぶの人は京劇の改革に反対しているではありませんか。こういう人たちは社会主義に背をむけ、資本主義、封建主義に目をむけていますから、失敗するにきまっています。大衆がかれらを見さげるのはまったく正しいことです。われわれは社会主義をおしすすめているのに、かれらは封建主義、資本主義をおしすすめています。いま、六億余の観客は生きている人間を演じた劇を見たいというのに、かれらはこのんで死んだ人間を演じています。かれらは九五パーセントの人から浮きあがっているのですから、たいしたものではありません。

だが戦術的には、同志のみなさんはいいかげんな態度に出てはならず、かならず重視しなければなりません。脚本、監督、出演から、それぞれの幕、場、配役、さらにはそれぞれのうた、せりふ、しぐさにいたるまで、みな十分に重視しなければなりません。労働者の役なら労働者らしく、農民の役なら農民らしく、兵士の役なら兵士らしくなければならないし、なにを演ずるにもそのものに似ていなければなりません。京劇らしくなければならないこと、演ずる役柄にも似ていなければならないこと、それはむずかしいことであって、重視しなければ、りっぱにやることができません。京劇の改革というこれほど大きな文化革命の闘争では、かならず質に注意し、粗製濫造であってはなりません。京劇の改革は、あの甘栗のように、鍋にほうりこんで、炒りあげ、すぐその場で売るというわけにはいきません。また、臓物の水炊きのように、羊のはらわたを鍋になげこみ、さっとゆでただけで、すぐ食べるというわけにもいきません。これはそんなに簡単なことではなく、ちょっと手をつければできるというようなものではなく、一挙に完全なものになるというものでもないのです。いまのこっているいちぶの伝統的な劇をとってみても、どれだけ多くの人の手を経てきたか、どれだけ多くの改革を経てきたか、どれだけしばしば手を加えられてきたかがわかると思います。われわれがいま取りくんでいるのはまったく新しい事業で、労農兵を演ずるということです。これまで、京劇の舞台ではかれらを演じませんでしたが、いまわれわれはかれらを演じなければならず、それもりっぱに演じなければならないのですから、そんなに容易なものではありません。ですから重視しなければならないのです。一挙に板についたようにうまく改革できると思ってはなりません。それは不可能なことです。基本的にうまく改革で

きれば、それで結構なのです。革命的でさえあれば結構なのです。内容的、芸術的に不十分なところがあれば、ひきつづき不断に手を加えていけばいいのです。

改革の過程で意見のくいちがいがなく、論争がおこらないなどということは、ありえません。意見がくいちがい、論争がおこるのはあたりまえです。もともとふるい時代の人間を演じ、帝王将相、才子佳人を演じていたものが改革して、とつぜん革命的な現代ものを演ずることになったのですから、なんの意見もないとすれば、それこそおかしい話です。

意見がくいちがい、論争がおこれば、どうしたらいいでしょうか。同志的な態度で討議と研究をおこない、たがいにたすけあって、りっぱなものをつくりあげてゆくべきです。革命的な現代ものがすこしぐらい欠点をもっていたとしても、一気に踏みころしたり、なぐりころしたりしてはなりません。われわれは新たにひらいた色あざやかなこの花を大事にまもり、そだててゆく必要があります。論争がおこってもそれはたいしたことではありません。ほんとうに改革に賛成する善意の意見でさえあれば、たがいに耳をかたむけ、いっしょに討議すべきであります。意見があれば、陰口をたたくのではなく、面と向かってはっきり言うべきであります。こうした作風をやしなう必要があります。いぜん、京劇界ではそれぞれのグループが張りあって、「一座かたぎ」や「組合かたぎ」がずいぶん強いものでした。そういう悪い習慣は旧社会がのこしたものです。

いまそれがすっかり取りのぞかれたかというと、かならずしもそうではないようです。あなたが上演すればわたしが陰でケチをつけ、わたしが上演すればあなたが陰でケチをつけるといったぐあいです。それぞれ自分のグループをもつのですが、中華人民共和国の大グループだけはつくりたがらず、プロレタリア国際主義の大グループなどなおさらのことです。中華人民共和国はもう七億ちかい人口をもっています。中国共産党中央委員会と毛沢東同志の指導のもとで、みんなが大団結すればいいではありませんか。ところが、いちぶの人びとはこの大団結では気がすまず、是が非でも自分の小団結をやらなければ気がすまないのです。わたしはこれらの同志や友人に、もうすこしワクをひろげるようおすすめします。

以上が、京劇は改革する必要があるかどうか、どのように改革したらよいかという問題です。わたしは以上のいくつかの意見を提出して、みなさんに考えていただくことにします。これが第一の問題です。

二

第二の問題、京劇の改革をりっぱにやりとげるように保証するには、なにをしなければならないか、またどんな前提があるか。

前提は二つあります。

一、京劇の作者、演出家、俳優は労農兵のなかに深くはいって、労農兵と一体になり、労農兵と血肉の関係を結ばなければならない。いいかえれば、京劇の改革も、毛沢東同志のうちだした「大衆のなかから、大衆のなかへ」という路線を実行しなければならないということであります。こうしてこそはじめて、いい作品がうまれ、京劇の革命的な現代ものがうまく上演されます。もしも全然労農兵とともに生活せず、労農兵を知らないで、いきなり舞台でかれらの英雄的な形象をつくろうとしても、できるものではありません。しかも、ただ労農兵とともに生活するだけではまだ不十分で、労農兵のなかの英雄的人物の長所をあつめ、舞台でかれらの典型的な形象をつくりださなければならないのです。ですから、京劇工作者はかならず労農兵のなかに深くはいり、工場、生産隊、中隊へいき、労農兵と一体にならなければなりません。いちぶの同志、いちぶの友人は工場、生産隊、中隊でごく短期間すごしただけでも、収穫が少なくなかったと感じています。もし一年、二年または数年をすごしたら、収穫はもっと大きいのではないでしょうか。首都には作家、劇作家はたくさんいますが、出した脚本はそうたくさんありません。それはなぜでしょうか。おもな原因は、大衆から浮きあがり、実際からかけはなれているということです。機関のなかにとじこもったきり、工場、生産隊、中隊へいかないで、どうしてよい作品が書

けるでしょうか。またどうして、よい作品をたくさんつくれるでしょうか。もちろん、多く書けるはずがありません。いちぶの劇では、俳優の演技もあまり似ていないし、演出もあまりピッタリしておりません。それは主として演出家や俳優が労農兵とともに生活したことがないか、生活した時間がひじょうに短いためです。

労農兵のなかに深くはいっていくことは、それほど簡単なことではありません。わずか数日間はいっていって、お客になるのは割合やさしいことですが、ほんとうに労農兵と一体になり、血肉の関係をむすぶのは容易なことではありません。それをやってのけるには、なによりもまずプロレタリアートの立場に立ち、労農兵と心を一つにし、プロレタリアート、貧農、下層中農と心を一つにして、まごころからかれらに奉仕するのでなければなりません。みんながよろこんで大衆の小学生となる必要があります。あなたがただけではなく、わが党の活動家、党の中央委員にしても、もしもはいっていった場合、まず大衆の小学生となってみんなに教えをこうのでなく、いきなりああだこうだと指図するなら、農民、労働者は言うことがあっても口には出さないでしょう。党の仕事にたずさわる多くの同志は、つねに労働者、農民大衆とつながりをもっていますが、やはりできるだけ一ヵ所に定着して、大衆と同じものをたべ、同じ家に住み、同じように働き、よろこんで大衆の小学生とならなければなりません。そうだとすれば、なおさら京劇工作者

は農村、工場、中隊へいって、大衆の小学生にならなければならないのではないでしょうか。やはりよろこんで大衆の小学生にならなければなりません。もちろん、年よりや体の弱いものは、無理をして同じものをたべ、同じ家に住み、同じように働く必要はなく、機会のあるときに参観にゆけばよいでしょう。青年、壮年の文芸工作者は、わが党の活動家や他の分野の活動家と同じく、労農兵とともに生活するべきであります。

京劇の改革を成功させるには、これが一つの前提です。

二、京劇工作者の思想は変革されなければならない。つまり革命化、プロレタリア化されなければならない。始めから終わりまで、内から外まですべて一致すること――これが「化」ということです。つまり、心の底から革命化することです。ある段階で革命化するばかりでなく、徹頭徹尾革命化する必要があります。これはなまやさしいことではありません。あなたが上演しているのは革命的な現代ものです。ですから、もしもあなたの思想が革命化、プロレタリア化していなければ、どうしていい脚本が書け、りっぱな演出ができるでしょうか。もしもあなたの思想が革命化していなければ、労農兵と一体になって、血肉の関係をむすぶこともできません。あなたの頭が封建地主階級の思想、ブルジョアジーの思想でいっぱいになっていてどうしてプロレタリアートや勤労大衆と一体になり、かれらと血肉の関係をむすぶことができるでしょうか。革命的

な現代ものを上演しようとするなら、まず第一に思想を革命化しなければなりません。自己を改造し、高める決意をしなければなりません。革命をする決意さえあれば、りっぱにやれます。今日すこし変わり、明日またすこし変わるというように、変われば変わるほど革命的な思想は多くなり、時がくれば根本的な変化がおこります。この面でのいくつかの根本的な問題については、毛沢東同志が『延安文芸座談会における講話』のなかではっきりのべています。わたしは同志のみなさんがこの講話をもう一度よく読んでみるようおすすめします。

正直にいって、いちぶの人はいまひじょうに矛盾しています。体はすでに社会主義社会にはいっているのに、頭はまだ封建主義社会かあるいは資本主義社会にとどまっています。体と頭が二ヵ所にわかれて、あんなにくびを長くのばしていては、苦しくてたまらないでしょう。社会主義の飯を食い、社会主義のきものを着、生活上のすべての点で社会主義から供給をうけ、労農兵から供給をうけているのに、労農兵に奉仕する劇、社会主義に奉仕する劇をやらず、思想がいまだに封建主義的あるいは資本主義的であるというのですから、これはひじょうに矛盾しているわけです。その人じしんがそうであるのならともかくとして、自分の姿にあわせ、京劇を利用して、世界を改造し、われわれが革命的な現代ものをやるのに反対しようとまでたくらんでいるのですから、ひじょうによくないわけです。では、どうすればいいでしょうか。やはりこういう人には、

自分の思想を改造することにつとめ、頭もろとも社会主義社会にはいった方がいいとすすめることです。

毛沢東同志は、われわれがいますすめている農村の社会主義教育運動にたいして、「人を再教育し、革命の隊伍を再組織」しなければならないと提起しています。では、なぜ人を再教育するのか。それは社会主義革命と社会主義建設のためです。では、どういう革命の隊伍を再組織するのか。社会主義の革命の隊伍を再組織するのです。多くの人は以前民主主義革命にたいしては思想的準備ができていましたが、社会主義革命にたいしては思想的準備が不十分であるか、まったくそれができていなかった場合さえあります。われわれもこれまで全国で系統的、全面的にすべての面で社会主義教育をおこなうということはしませんでした。いま、全国の都市と農村で社会主義教育運動がくりひろげられています。これをこれから先もしっかりやっていきさえすれば、われわれの社会主義革命を順調におしすすめ、われわれの社会主義建設をますますりっぱにやっていくことができるばかりでなく、修正主義の根っ子をほんとうにきれいさっぱりと取りのぞくこともできます。

同志のみなさん、われわれのところには修正主義などあらわれないと思ってはいけません。もしも階級闘争、社会主義教育をしっかりやらなければ、修正主義があらわれるかも知れません。

正直にいって、文芸界の問題はずいぶん多く、けっして他の分野より少なくはないのです。ですから、文芸戦線の分野で整風をおこない、社会主義教育をくりひろげ、二つの道の闘争をくりひろげなければなりません。毛沢東同志の著作をよく学び、マルクス・レーニン主義をよく学び、しっかりとプロレタリアートの立場に立って、自分が過去数年間にどんな作品を書き、どんな劇を上演し、どんな映画をつくり、どんな歌をうたい、どんな音楽を演奏し、どんな絵をかいたか、そのうち、どういう作品、どういうものがブルジョア的あるいはブルジョア的影響ののこりかすをもっているのか、あるいは封建的であるのか、こういう点を自分で点検し、整理してみなければなりません。誤りや欠点を見つけたら、それをあらためればいいのです。文芸界はみなこうしなければならず、京劇界も例外ではありません。みんなで社会主義、共産主義にとりくみ、封建主義的、資本主義的思想の影響を全部根こそぎにしてしまうことです。こうしてはじめて、京劇の改革はかならずりっぱになしとげられ、京劇にはかならず輝かしい偉大な前途がひらかれるでしょう、わたしはあえてこう断定します。

社会主義の演劇を大々的に発展させ、繁栄させて社会主義の経済的土台によりよく奉仕させよう

＊つぎにかかげるのは、一九六三年末から一九六四年初頭にかけて開かれた華東地区新劇競演大会での演説である。本文の発表にあたり若干の修正と補充がおこなわれた。

柯慶施

社会主義の演劇を発展させ、繁栄させて、演劇を社会主義時代の労農兵に奉仕させ、プロレタリアートの政治に奉仕させ、階級闘争、生産闘争、科学実験の三大革命運動に奉仕させ、社会主義の経済的土台の強化・発展に奉仕させることは、社会主義革命および社会主義建設の時期におけるきわめて重要で困難な任務であり、社会主義革命の重要な構成部分であります。社会主義の演劇を発展させ、繁栄させるには、党の「百花斉シク放キ」「陳キヲ推シテ新シキヲ出ス」という方針の指導のもとに、演劇の改革をおこない、資本主義、封建主義のふるいものを排除し、社会主義、共産主義の新しいものを発展させ、社会主義の革命的現代劇を大いに提唱しなければなりません。ふるい演劇を改革し、新しい演劇を提唱することは、たんに演劇界、文芸界の先鋭で複雑な闘争であるだけでなく、「プロレタリア思想をさかんにしブルジョア思想を一掃する」とともに社会のふるい風習を変える革命闘争であり、広はんで深刻な社会主義革命であります。

社会主義の演劇を大いに発展させ、繁栄させるために、また長期にわたって封建主義、資本主義に奉仕してきたふるい演劇を徹底的に改造するために、中国共産党中央委員会と毛沢東同志が何度かにわたってさししめした精神にもとづいて、華東地区ではかなり大規模な新劇競演大会が一九六三年末から一九六四年初頭にかけて催されました。華東地区各省、市、軍隊の一九の新劇劇団がこの競演に参加し、かれらが一九六三年に創作した多幕もの一三、一幕もの七つを上演しました。これらの劇の内容はみな、わが国の社会主義革命と社会主義建設を反映したものであり、その題材は豊富多彩で、テーマも一般に革命的で健全であり、社会主義時代の新しい人間像、新しい事物、新しい精神的面貌、とりわけ、労農兵のなかの新しい人間像、新しい事物、新しい精神的面貌を集中的に反映しており、広はんな大衆からよろこばれ、好評を博しました。これらの劇の中で、≪激流とのたたかい≫≪一家の人≫≪竜江賛歌≫≪豊作のあと≫≪一番と二番≫≪母と子の邂逅≫≪売り場≫≪若い世代≫≪まめサッカー・チーム≫など比較的すぐれた出しもの

は、新劇のレパートリーとなっただけでなく、他の形式の演劇舞台にも移されています。また、今回の競演大会では、われわれは大会に参加した演劇、文芸工作者を組織して、毛沢東同志の関係著作を学習し、ここ数年間の活動を点検し、経験を総括、交流し、今後の活動プランを定めましたので、政治、思想の面においてもきわめて大きな成果をあげました。これらすべては、毛沢東文芸思想の赤旗を高くかかげてかちとったきわめて大きな勝利であります。

今回の華東地区新劇競演大会は、華東地区の新劇の発展と繁栄のために広びろとした道をきりひらいただけでなく、華東地区の演劇活動ぜんたいの発展と繁栄を力づよく押しすすめ、励ます作用をはたしました。いま、華東地区の演劇舞台には、革命的な現代劇を大いに上演するというこれまでにない活気にみちた局面が現われはじめています。新劇ばかりでなく、京劇やその他の地方劇、さらには音楽、舞踊、評弾（ピンタン）（うたいものの一種）、語りものなどもすべて帝王将相、才子佳人のワクからとび出して、われわれの偉大な社会主義時代の精神的面貌を反映するようにつとめています。要するに、いま、われわれの演劇、文芸活動ぜんたいは、中国共産党中央委員会および毛沢東同志のゆきとどいた配慮のもとに、時代のあゆみに追いつこうと努力し、さらに一歩すすんで社会主義革命および社会主義建設の情勢の要求にこたえ、社会主義の経済的土台に照応しようと努力しています。そしてこの努力は広はんな労農兵大衆から熱烈に歓迎されています。

ここでわたしは華東地区の演劇工作と文芸工作ぜんたいの状況に照らしつつ、社会主義の演劇、文芸の発展と繁栄に関する若干の問題について話してみたいと思います。

（一）われわれの演劇は、かならずプロレタリアートの政治に奉仕し、社会主義の経済的土台に奉仕しなければならない

演劇がだれに奉仕するかということは、文芸ぜんたいがだれに奉仕するかということと同じように、根本的な問題であり、原則的な問題であります。毛沢東同志は早くも一九四二年に『延安文芸座談会における講話』のなかで、「われわれの文学・芸術はみな人民大衆のためのもの、なによりもまず、労働者、農民、兵士のためのものであり、労働者、農民、兵士のために創作され、労働者、農民、兵士によって利用されるものである。」とはっきり指摘しています。毛沢東同志は同書のなかでさらにこうのべています。「たしかに、搾取者、抑圧者のための文芸もある。地主階級のための文芸が封建主義の文芸である。中国の封建時代の支配階級の文学・芸術はこのようなものであった。今日になっても、このような文芸は中国ではなおひじょうに大きな勢力を

もっている。ブルジョアジーのための文芸がブルジョア文芸である。魯迅が批判した梁実秋（リャンスチュウ）のような連中は、口さきでは文芸は超階級的なものだなどと言っているが、実際には、かれらはブルジョア文芸を主張し、プロレタリア文芸に反対しているのである。帝国主義者のための文芸は周作人（ジョウズオレン）、張資平（ジャンズーピン）らのやからがやっているもので、これは民族裏切り者の文芸と呼ばれるものである。われわれにとっては、文芸は上述した人びとのためのものではなくて、人民のためのものである。」毛沢東同志が指摘した、文芸が人民に奉仕し、労農兵大衆に奉仕するという方向は、われわれのプロレタリア演劇、文芸ぜんたいの根本的な方向であり、プロレタリア演劇、文芸を封建主義的、ブルジョア的演劇、文芸から区別する分水嶺であります。演劇、文芸が人民に奉仕し、労農兵大衆に奉仕するという問題は、とりもなおさず、九〇何パーセント以上の革命的人民に奉仕する問題であります。革命的な演劇、文芸は圧倒的多数の革命的人民に奉仕するものであって、けっして地主、ブルジョアジーおよびかれらの老若遺臣などの少数の人に奉仕するものではありません。人民に奉仕し、労農兵大衆に奉仕することは、われわれ革命的プロレタリアートの演劇、文芸の唯一の正しい方向であります。過去の新民主主義革命の段階であろうと、また現在の社会主義革命および社会主義建設の時期であろうと、われわれはつねにゆるぎなくこの方向を堅持しなければなりません。

演劇、文芸がだれに奉仕するかという問題は、とりもなおさず上部構造が経済的土台に奉仕するという問題であります。演劇、文芸は上部構造のいちぶで、階級社会においては、一定の階級の政治に従属し、一定の階級の政治に奉仕するものです。つまり、上部構造はかならず経済的土台に照応し、経済的土台の客観的要求にこたえ、経済的土台に奉仕するものでなければならないということです。毛沢東同志はその著書『新民主主義論』のなかで、この問題について深く掘りさげた解明をしています。毛沢東同志はこうのべています。「一定の文化（イデオロギーとしての文化）は一定の社会の政治と経済の反映であり、またそれは一定の社会の政治と経済に偉大な影響をあたえ、作用をおよぼす。経済は土台であり、政治は経済の集中的表現である。このことは、文化と政治・経済との関係および政治と経済との関係についての、われわれの基本的な観点である。」一定の階級の政治に奉仕し、一定の社会の経済的土台に奉仕することは、イデオロギーとしての文化のいちぶである演劇、文芸、また上部構造のいちぶとしての演劇、文芸からいえば、必然的なことです。いかなる階級にしても、その階級の経済的土台に奉仕する上部構造、その階級の利益に奉仕する演劇、文芸をつくります。封建地主階級、ブルジョアジーにはかれらの演劇、文芸があり、かれらに奉仕しています。われわれプロレタリアートにも自分らの演劇、文芸がなければならず、プロレタリアートの政治に奉仕し、社会主義の経済的土台に奉仕しなく

てはなりません。新民主主義革命の段階においては、われわれの文化は反帝、反封建、反官僚資本主義の闘争に奉仕し、新民主主義の政治に奉仕し、新民主主義の経済的土台に奉仕するものでありました。その当時の文化にも社会主義的な要素があり、しかも決定的な役割をはたす要素ではありましたが、その基本的性格からいって、依然として新民主主義の文化であったのです。現在は、社会主義革命と社会主義建設の時期です。したがって、われわれの文化は社会主義の文化、社会主義の文芸、社会主義の演劇でなければなりません。毛沢東同志がのべているように、「社会主義を内容とする国民文化は、社会主義の政治と経済を反映するものでなければならない。」① われわれの政治と経済が社会主義的なものであるのに、われわれの演劇、文芸が資本主義的、封建主義的または依然として新民主主義的なものであるというようなことは考えられないことです。社会主義の時代においても演劇、文芸には反帝反封建の任務がありますが、もっとも主要な、そしてもっとも根本的な任務は徹底的に資本主義に反対し、ブルジョアジーに反対する闘争であり、社会主義に奉仕し、社会主義の経済的土台を保護し、強化し、発展させるために奉仕することです。これはわれわれがまず最初にはっきりさせておかなければならない問題です。

社会主義社会は階級と階級闘争が存在している社会です。社会主義の段階、すなわち、資本主

義から共産主義に移行する全歴史的時期にわたって、プロレタリアートとブルジョアジーの二つの階級の闘争、社会主義と資本主義の二つの道の闘争が存在しています。一方においては、社会主義勢力を代表する新しい人物、新しい事物、新しい思想、新しい気風がはつらつとして成長しており、広はんな人民大衆の政治的自覚はたえず高まり、社会主義、共産主義の思想をもった英雄的な模範的人物がたえず生まれており、社会主義事業は急テンポで前進しており、社会主義の経済的土台は日をおって強化、発展しています。だが他方、社会主義の経済的土台の障害となり、それを弱め、破壊するふるい事物がまだ存在しています。経済のうえでは、われわれは基本的に資本主義的所有制を消滅しましたが、国内でブルジョアジーのすべての影響を一掃しないかぎり、あるいは資本主義が発生するいっさいの根源をとりのぞかないかぎり、地球上にまだ帝国主義および資本主義が存在するかぎり、つまり共産主義に入るまでは、二つの階級、二つの道の闘争はとどまることがありません。政治思想やイデオロギー面での闘争は、経済面での闘争よりさらにいっそう複雑でまがりくねったものであります。ブルジョアジーは「平和的転化」をふくむさまざまの方法をもちいて復活の活動をすすめ、しかも一定の条件のもとでは、復活の可能性を現実に変えることもありうるのです。こうした闘争は必然的に演劇、文芸戦線にするどく反映されます。成長しつつある社会主義勢力、共産主義的要素は、終極的には滅亡する資本主義勢力、

封建主義勢力と長期にわたり、たえず闘争をくりかえすことによって、はじめて一歩一歩とそれにうち勝ち、それにとってかわることができるのです。

このはげしい、複雑な階級闘争のなかで、この広はんで、深刻な社会主義革命のなかで、演劇、文芸工作者をふくむわれわれ革命工作者はすべて、きびしい試練に直面しており、みずからの態度をはっきりと表明しなければならなくなっています。この闘争に積極的に参加し、社会主義、共産主義思想をもって資本主義、封建主義思想にうち勝つか、それともその逆をいくか？われわれの演劇、文芸工作者は、なによりもまず革命家でなければなりません。革命家であるなら、この闘争に積極的に参加しなければならず、この闘争を回避してはなりません。社会主義、共産主義の宣伝につとめなければならず、資本主義、封建主義の宣伝をしてはなりません。新しい事物の側に立たなければならず、ふるい事物の側に立ってはなりません。ところが実際には、この二つの階級、二つの道の闘争にたいして、われわれの演劇、文芸工作者の間にちがった態度が存在しているのです。積極的な態度もあれば、消極的な態度もあり、また反対の態度さえあるのです。反対の態度をとることはもちろん許せません。消極的な態度をとることも同様にまちがいです。消極的な態度とは、つまり、ふるいものにも反対しなければ、新しいものをも支持しないということです。反対もせず、支持もしなければ、ふるいものをはんらんさせ、新しいものを

おさえつける結果になります。これでは、新しいものがどうして急速に成長できましょう。またふるいものがどうして徹底的にうち倒されましょう。もしわれわれが根本的な立場や態度でこの問題の解決にあたらなければ、真の革命家とはいえませんし、社会主義に奉仕するということも、実際には空念仏になってしまいます。

では、われわれの文芸、演劇工作者はなにをもって社会主義に奉仕したらよいでしょうか。それはとりもなおさず、文芸という武器をもって現実の闘争に参加し、芸術的形象の影響力、芸術的形象の感化作用を通じて、社会主義、共産主義思想を宣伝し、資本主義、封建主義思想に反対し、人民大衆を啓発、教育し、かれらの政治的自覚を高め、その革命的精神をふるいたたせることです。社会主義革命の武器としての演劇、文芸は、人民大衆に革命的伝統についてだけでなく、革命の見通しについても教育をおこない、人民大衆がけだかい革命的意志をいだき、社会主義革命を最後まで断固やりぬき、世界各国人民の革命闘争を積極的に支援し、全人類の徹底的な解放のため、全世界において共産主義を実現するため奮闘するよう鼓舞しなければなりません。「文学は党文学とならなければならない」（レーニン）② これは革命的演劇、文芸の党派性、階級性によって決定されるものです。ところが、ある人は社会主義革命が勝利したのち、演劇、文芸を中国革命および世界革命をひきつづきすすめてゆくための武器と見なさず、それをただのひまつ

ぶしのものと見なしていることです。こうした見方はあきらかに非マルクス・レーニン主義的であり、革命的な演劇、文芸の方向に逆行するものです。社会主義社会において、もし演劇、文芸がプロレタリアートに奉仕しないなら、それはもはや社会主義の上部構造となることができず、退化変質して、修正主義の道をあゆみ、資本主義復活のための上部構造となってしまうのです。現代修正主義の上部構造、現代修正主義の演劇、文芸は完全に資本主義復活のための道具となっているではありませんか。かれらは「急先鋒」をもって任じ、ほしいままにブルジョアジーの人間性論、ヒューマニズム、平和主義、福祉主義をふりまき、ブルジョアジーのくちはてた、退廃的な生活様式を宣伝し、やっきになって革命に反対し、プロレタリアート独裁に反対し、社会主義制度を戯画化し、帝国主義の「平和的転化」政策に奉仕し、資本主義復活の道をきりひらくための道具となっています。われわれはまじめにこのきびしい経験と教訓をくみとらなければなりません。

演劇は大衆性をもった芸術形式のひとつです。それは舞台形象を通じて、いく百万いく千万の観客につよい影響をおよぼします。よい演劇はよい影響をうみ、わるい演劇はわるい影響をもたらします。ですから、すべての演劇工作者は自分の責任の重大さを認識し、革命にたいし責任をもち、大衆にたいし責任をもつという精神で、革命的現代劇をまじめにりっぱに書きあげ、りっ

ぱに演じ、実際行動のなかで毛沢東文芸思想を堅持し、毛澤東文芸思想にそむくいっさいのあやまった観点にたいして決然と闘争をおこなわなければなりません。

建国以来、華東地区の演劇活動は、毛沢東文芸思想にみちびかれ、きわめて大きな成果をあげました。これを過小評価してはなりません。しかし、われわれの演劇活動はまだまだ社会主義の経済的土台に照応していないということをも見てとらなければなりません。われわれの演劇界のなかには、いちぶの人は、口先では文芸が労農兵に奉仕する方向に賛成していますが、実際には党の文芸方針をつらぬこうとせず、社会主義の現実生活と闘争を反映する面では、この人たちの十五年らいの成績はまことに微々たるものであり、いったいなにをしてきたのかわからないほどです。この人たちはブルジョアジー、封建階級の演劇に熱中し、外国もの、ふるい時代のものを提唱することに熱中し、「死んだ人間」や怪談ものをさかんに演じ、社会主義の演劇を非難し、これに反対して、社会主義の現代劇が急速に発展できないようにたくらんでいます。また、いちぶの人は共産党員でありながら、こうした状況にたいしてそしらぬふりをし、封建主義、資本主義を宣伝するわるい演劇にたいして心を痛めもしなければ、口もはさまず、阻止もせず、反対もしません。ひどいのになると、理由を見つけてその弁護にあたり、「お化けは無害である」とか、「封建的道徳には人民性がある」などと言いふらしているありさまです。これとは反対に、現実生活

と革命闘争を反映した演劇にたいしては、腹のそこから熱情をこめて支持するのではなく、ひじょうに冷淡な態度をとっているのです。これらすべては、われわれの演劇界、文芸界に二つの道、二つの方向の闘争が存在していることを深刻に反映しているのです。この二つの道、二つの方向の闘争は、実質的には演劇、文芸がどの階級に奉仕するかという闘争なのです。階級と階級闘争が存在しているかぎり、文芸戦線のうえでのこうした闘争はつねに存在し、ひきつづき堅持され、最後までおこなわれます。

（二）社会主義の演劇は社会主義の現実の生活と闘争を反映し、社会主義時代の労農兵大衆を表現することを、おもな任務としなければならない

われわれが演劇をプロレタリアートの政治に奉仕させ、社会主義の経済的土台に奉仕させようとするなら、かならず、建国いらいの社会主義革命と社会主義建設を反映する現代劇を大いに提唱し、社会主義時代の労農兵大衆の現実の生活と闘争を積極的に表現し、工業、農業、軍事、文化・教育、商業などの各戦線の新しい人物、新しい事物、新しい思想、新しい気風を熱情をこめてた

たえなければなりません。新民主主義時期の革命闘争を反映する演劇ももちろん必要ではありますが、より大きな力をそそいで、社会主義時代を反映する演劇を創作しなければなりません。こうしてはじめて、社会主義時代を反映し、労農兵大衆を表現する革命的な現代劇が、われわれの演劇舞台で主流を占めることができるのです。また、こうしてはじめて、われわれは力を入れて、丹念に、より多くの、よりりっぱな労農兵大衆の英雄的形象をつくりだすことができ、かれらがどのようにして、階級闘争、生産闘争、科学実験という三大革命運動のなかで成長してきたかをえがきだすことができ、それを広はんな人民大衆の学習と見習いの手本とすることによって、いっそう多くの英雄的な模範人物を急速に成長させることができるのです。

毛沢東同志は、「革命的な文芸は、実際生活にもとづいて、種々さまざまな人物を創造し、大衆が歴史の前進をうながすのをたすけなければならない」③とわれわれに教えています。これはわれわれの社会主義演劇創作の原則であるばかりでなく、その光栄な責務でもあります。勤労人民は歴史の主人公であります。社会主義時代の労農兵大衆は新生活の創造者であり、建設者であります。プロレタリア演劇、文芸発展の歴史は、プロレタリアートと勤労人民が党の指導のもとに、演劇、文芸を通じて、自己を表現するためにたたかった歴史であり、かれらが演劇、文芸という武器をもちいて、自己の解放をかちとるためにたたかった歴史であるといえます。社会主義

時代では、われわれの演劇は、主として現実の生活と闘争を反映し、主として労農兵大衆を表現することによって、はじめて永遠に尽きない生命力をかちとり、偉大な発展の前途をもつことができるのです。われわれの演劇工作者は、いっそう多くの、より完全な、肯定的な英雄的人物の形象をつくり、かれらのプロレタリア革命精神と共産主義の崇高な品性を熱情をこめてたたえ、そして、否定的な人物を徹底的に批判し、革命的な演劇の戦闘的な役割をあますところなく発揮させなければなりません。われわれの演劇工作者はまた、労農兵大衆を表現することを方向としてはじめて、自分が現実の生活と闘争のなかに身を投じ、労農兵大衆を深く理解し、かれらと結びつき、自分の思想を徹底的に改造して、自分を真のプロレタリア演劇工作者にし、演劇を真に社会主義の演劇にしあげるのに役立つのです。こういったからといって、ほかの劇を上演してはいけないということになるでしょうか。いや、そうではありません。わが国の歴史上および世界各国人民の階級闘争、民族解放闘争を正しく反映している劇、帝国主義、封建的支配者、ブルジョアジーの醜悪な正体をあばいている劇、大衆が歴史の前進をうながすのに役立つすべての劇、革命的意義をもつすべての劇――このような劇であるかぎり、みな上演していいのです。このほか、手を加えることによって古くてもこんにち役立たせることのできる伝統的な劇や、人民のためになるすべての劇は、毛沢東同志が『人民内部の矛盾を正しく処理する問題について』という

論文のなかで指摘した六つの政治的基準をふみはずしてさえいなければ、やはり上演を許されるのです。しかし、社会主義の演劇の舞台では、主として社会主義の生活と闘争を反映し、主として社会主義時代の労農兵大衆を表現しなければなりません。これはかならず確認し、明確にしておかなければならないことです。

なぜ革命的な現代劇を提唱しなければならないかということについて、いまだにちがった見方をしている人がおります。現代劇を提唱するのは、時代がかわり、社会がかわり、どの芸術形式も「ふるい時代の人間の生活を表現できると同時に、現代人の生活をも表現でき、この階級の人物を表現できると同時に、あの階級の人物をも表現できる」、こうしてはじめて演劇の不充分な点を「おぎなう」ことができ、「完ぺき、豊富、有力」なものにすることができるからだ、とある人は言っています。こうした階級的な分析を欠いた観点は、あきらかにわれわれがなぜ革命的な現代劇を提唱しなければならないかということをねじまげています。われわれが現代劇を提唱しているのは、けっして不充分な点をおぎなうなどという問題ではなく、演劇の根本的改造の問題であり、演劇の方向をただして、労農兵を舞台の主人公にし、演劇を社会主義に奉仕させる根本的な問題なのです。もし、現代劇が、「ふるい時代の人間の生活を表現できると同時に、現代人の生活をも表現でき、この階級の人物を表現できると同時に、あの階級の人物をも表現でき」、

またこうしてはじめて「完ぺき、豊富、有力」なものといえるというなら、いったいあなたは主として社会主義時代の労農兵大衆を表現しようとしているのですか、それとも主として封建時代の帝王将相、才子佳人を表現しようとしているのですか。労農兵の革命的大衆をたたえ、ブルジョアジーやその他の反動階級の人物を批判するのですか、それともそれとは逆なのですか。こうした見解をもっている人は、表面ではやはり演劇の革命に賛成し、労農兵を表現することに賛成していますが、実際には、逆に帝王将相、才子佳人を保護しており、労農兵をせいぜいサシミのつまにしているにすぎません。みたところ、同じように現代劇を提唱していても、そのなかにはやはり革命的なもの、非革命的なもの、反革命的なものの区別があります。われわれが提唱しているのは社会主義の演劇であって、その他のどんな演劇でもなく、また革命的な現代劇であって、その他のどんな現代劇でもありません。

だからこそ、われわれが現代劇を提唱していることにたいして、帝国主義者と現代修正主義者は、このうえもなく憎しみをいだいているのです。帝国主義者は、われわれが「無味乾燥な」現代劇を「ひじょうに歓迎されている帝王将相、才子佳人をテーマとした」旧劇にかえていると、デタラメを言っています。現代修正主義者も帝国主義者と呼吸をあわせて、たがいに唱和し、われわれの現代劇を「修行」のための創作だとか、「実に多くの条文やワクでしばりつけられた」

創作だとか、「悪質な俗物的ドグマ」だとか、さかんに攻撃しています。このような攻撃と中傷は、現代修正主義者がその反動的なブルジョア的立場から出発して、なにが社会主義の演劇であり、なにが革命的な現代劇であるかを根本的に理解していないことを立証しています。かれらのところでは、革命的な現代劇ばかりでなく、真に強大な生命力をもち、いきいきとして活気にあふれたマルクス・レーニン主義までも「修行」であり、「悪質な俗物的ドグマ」である、と非難しています。帝国主義者と現代修正主義者のさまざまな攻撃や中傷は、われわれをみじんも傷つけることができないばかりか、逆に、われわれが社会主義の演劇を提唱し、革命的な現代劇を提唱するのが、まったく正しいことであり、必要なことであることを、よく物語っています。

人民の生活、労農兵の生活は、われわれのくみつくせない創作の源です。毛沢東同志は、「あらゆる種類の文学・芸術の源は、いったいどこにあるのか。イデオロギーとしての文芸作品は、みな一定の社会生活が人間の頭脳に反映して生まれたものである。革命的文芸は人民の生活が革命的作家の頭脳に反映して生まれたものである」④とのべたことがあります。社会主義時代の人民の生活は豊富多彩で、いきいきとして活気にみちたものであります。わが中国は数千年の歴史をもっています。この数千年のあいだに、歴史の創造者としての人民は、自分の輝かしい生活と闘争をもっています。しかし、かれらは長期にわたる反動的支配のもとで、抑圧され、搾取され

て、その生活は実に悲惨なものでした。ところで、いまはどうでしょうか。革命は全国で勝利し、わが国人民の頭上にのしかかっていた帝国主義、封建主義、官僚資本主義の強敵はくつがえされ、人民は政治的に解放され、もはや抑圧をうけることはなくなりました。また、生産手段の資本主義的私有制は一掃され、もはや搾取をうけることもなくなりました。このような状況のもとで、わが国の勤労人民は中国共産党と毛沢東同志に導かれて、自分の才能、知恵と無限の創造力をあますところなく発揮して、偉大な社会主義革命と社会主義建設の事業にはげみ、共産主義の遠大な理想を実現するために奮闘しています。階級闘争、生産闘争、科学実験という三大革命運動のなかで、工業、農業、軍事、文化・教育、商業などの各戦線で、人びとは世界を改造するとともに自己を改造しています。このような闘争のなかでは、敵味方の矛盾が存在し、先進と立ちおくれの矛盾をふくめた人民内部の矛盾が存在しています。われわれの事業、われわれの人民は、さまざまな矛盾をたえず解決し、さまざまな困難をたえずのりきっていく過程で、不断に前進するものであります。現実の生活と闘争のなかで、われわれの労農兵大衆とその幹部の社会主義、共産主義の思想的自覚は急速に高まり、その精神的面貌は目を見はらせるほど一新しています。各戦線、各方面には、新しい人物、新しい事物、新しい思想、新しい気風が大量に出現し、社会主義、集団主義の英雄的な模範人物がますます多くなっています。華東地区のいちぶの資料

に目をとおしただけでも、新しい人物、新しい事物がいたるところにあふれており、たえまなく生まれていることがわかります。

かれらのうちのあるものは、階級闘争のなかでしっかりした立場をとり、敵の脅迫や懐柔にたじろがず、ふるい思想やふるいものの影響にむしばまれず、いつまでもプロレタリア戦士としてのほんらいの面目を保っています。たとえば、≪耿君の家にやってきた賀さん≫のなかに登場する党支部書記や、≪りっぱな南京路の第八中隊≫でたたえられている解放軍の戦士が、まさにそれです。また、揚州の地方劇≪奪印≫、新劇≪ネオンの下の哨兵≫はプロレタリア戦士の輝かしい品性を文芸作品のなかに反映させたものにほかなりません。山東省曲阜県陳荘公社の陳家荘大隊は、党支部書記であり全国農業労働模範である陳以梅の指導のもとに、早くも一九五二年から農業生産協同組合を組織しはじめ、三年のうちに六七パーセントの増産をかちとりました。毛沢東同志は、『中国農村における社会主義の高潮』という著作のなかで、それを「きわめてりっぱに運営された協同組合」だと称賛しています。だが、この大隊は一九六一年に、一度階級敵に指導権をのっとられ、生産は破壊され、ムー（一ムーは六・六六七アール＝訳注）あたりの生産高は二二五キロから一五〇キロにまでおちました。しかし、陳以梅は依然として貧農、下層中農にしっかりと依拠して闘争をつづけ、社会主義教育運動のなかで貧農、下層中農委員会を組織し、

貧農、下層中農の優勢な地位をうちたて、資本主義と封建勢力の攻撃を撃退し、指導権を奪いかえしました。こうして、現在では、生産はふたたび新たな発展をみせ、ムーあたりの生産高は一五〇キロから三〇〇キロにはねあがりました。またたとえば、上海市のリンタク労働者程徳旺（チョンドーワン）は、平凡な労働のなかで、誠心誠意乗客に奉仕し、困難なことは自分がひきうけ、便利なことは他人にゆずるといった態度をとるだけでなく、仕事の中でも、社会治安の維持、社会主義利益の防衛にすすんで協力し、悪党や悪行と断固たたかっています。そして、一九六二年このかた、政府をたすけて一一件の違法事件を検挙しました。

かれらのうちのあるものは、工業生産のなかで我を忘れて働き、生産高を高め、品質を向上させ、コストをひきさげ、技術を革新し、発明をおこなうために、なみなみならぬ苦労をし研究して、巨大な貢献をしました。たとえば、上海の永鑫（ユンシン）つぎ目なし鋼管工場は、もともと小さな町工場でしたが、古参労働者潘阿躍（パンアヤウ）らが先頭にたって、自家設備と自家技術で比較的精度の高い、良質のつぎ目なし鋼管をつくりだし、しかもその生産過程で、積極的に研究をおこない、異型鋼管をつくる機械を改善し、異型つぎ目なし鋼管の大量生産の課題を解決しました。上海アルコール工場の労働者・職員は、奮起発憤して、自力で装備し、ここ数年のあいだに、不断の技術革新によって、小さなボロ工場を、国際的な先進作業工程をもちいて生産をおこなう工場に改造しま

した。この工場の生産高は現在、一九五七年に比べて四倍以上にふえています。多くの労働者は、ある技術上のカナメになる課題を解決するために、技術革新をやりかけると、寝食を忘れて、あちこち走りまわって疲れをおぼえないというありさまです。

かれらのうちのあるものは、農業生産のなかで、りっぱに集団的生産をおこなうために一心不乱にがんばり、刻苦奮闘してひじょうに悪い生産条件を改善し、農業技術を研究し、低い生産高を高い生産高に変え、高い生産高をいっそう高いものへと変えています。江西省（チャンシー）にロケット隊という名の生産隊があります。隊長は丁長華（ディンチャンホワ）とよぶ若い女性です。かの女の働いているところは、元来ひじょうに貧しく、土地は砂地で、生産高は低いものでした。ところが、かの女は大いに志気をもやし、意気込んで、先頭にたって働き、一生懸命に社員を導いて集団的生産をりっぱにおこないました。そこで、ここ数年らい、食糧はムーあたり五五〇キロ以上、くり綿は一〇〇キロ以上の収穫をおさめました。養豚もひじょうにさかんで、耕地一ムーにつきおよそ二頭のブタが飼われています。もし、かの女になぜ生産をりっぱに指導することができたのか、ときくなら、かの女はつぎの四つの経験について話してくれるでしょう。それは、第一にこの上もなく公正で私心のないこと、第二に身をもって手本をしめすこと、第三に大衆路線をまもること、第四に科学実験をおこなうことです。江蘇省（チャンスウ）に泗陽（スーヤン）農場という国営農場があります。この農場は旧黄河のほ

どりにあり、やはり砂地です。農場長の張学同はもともと農民で、遊撃戦に参加したことのある人です。かれが赴任してから、そこの農場はりっぱに建設され、くり綿もムーあたり一〇〇キロの生産高をあげるようになりました。甘薯は、食糧に換算して、よそではムーあたり一五〇キロから二〇〇キロしかとれないのに、かれのところでは、一九六二年にわたしが見にいったとき、災害をうけていたにもかかわらず、なお二五〇キロ以上の収穫をあげておりました。そればかりでなく、かれはまた付近の生産隊をも導き、立ちおくれた生産隊でも、かれにまかすと、一年のうちに生産はぐんぐんのびるのです。山東省泰安県に徂徠人民公社というのがありますが、ここの社員や幹部は、自力更生の精神と愚公移山の気概をもって、山地をだんだん畑につくりかえ、洪水をダムにせきとめ、貧しい山間地帯の面目を改め、ムーあたり三〇〇キロに達する食糧を生産しました。

かれらのうちのあるものは、自然災害とのたたかいを通じて、全面的なものの見方、高度の共産主義的な風格、英雄的で、ねばり強い革命的意志をもつようになりました。福建省では、一九六三年の旱ばつとのたたかいのなかで、人びとを感動させるひじょうに多くの事跡がありました。何ヵ月ものあいだ雨が降らないので、河の水がかれはてましたが、そのとき、河床をさらに深く掘りさげたり、こちらの河に水がなくなればあちらの河から水をひいてきたりしました。新

劇《竜江賛歌》のなかで描かれている竜海県榜山人民公社竜江大隊の幹部と社員の「歩を捨てて飛車を保つ」という風格は福建省での旱ばつとのたたかいの縮図にほかなりません。またたとえば、一九六三年河北省の大水害のとき、山東省でダムの水を放水したのも局部の利益を犠牲にして、全体の利益をまもった壮挙であり、恩県洼一カ所だけでも自発的に数十万ムーの耕地を水浸しにして、他の地方のより広い耕地をまもりぬきました。洪水をくいとめるために、現地では臨時の突貫工事で堤防をきずきました。その堤防はやっとできあがりましたが、人がその上に立つとソファーの上に立っているようで、大風や大雨の襲来にもちこたえることができず、決壊するところがでてきました。どうすればよいか。このとき、われわれの解放軍、幹部と大衆は手に手をとって人ガキをつくり、水のなかに立って、堤防の前をふさぎ、大風や大雨とたたかいました。同時にその他の効果的な措置をこうじて、とうとう堤防をまもりとおしました。

かれらのうちのあるものは、国家、集団、個人この三者の関係を処理するにあたって、高いところに立ち、遠くを見とおし、国家の利益を先にして、集団、個人の利益をあとまわしにしました。たとえば、江西省彭沢県棉船人民公社江心大隊の党支部は、社員を指導してりっぱに綿花を栽培し、ここ数年らい、綿花の供出任務を年々超過完成してきました。かれらのかかげているスローガンは「家の門口にたって天安門まで見わたす」というのです。このスローガンはすでに各

地で大きな反響をよんでいます。このほか各地に、政府の食糧買い上げ任務完成にすすんで協力して国家の建設を支援したばかりか、他の地区に災害が発生したときは、たとえ自分の食いぶちをへらしても、余剰食糧を余分に国家へ売りわたし、災害地区を支援した人民公社や社員がたくさんいます。《豊作の後》は、国家の利益を先にし、集団の利益をあとまわしにする人民大衆のけだかい精神を表現したものであります。

われわれの人民解放軍や民兵のなかには、いっそう多くの英雄や模範的兵士がぞくぞくと現われています。南京某部隊の中隊長郭興福が工夫した先進的な教育方法は、すでに全軍におしひろめられています。海軍某部隊の水兵趙爾春、済南某部隊の戦士王永才は、防火や洪水とのたたかいのなかで自分の貴い生命をささげました。浙江省平陽県の民兵中隊長蘇旺巣は家族全員をひきつれて戦闘にくわわり、蔣介石一味の武装特務をせんめつしました。山東省崆峒島の漁民呂志玉の一家は、三代つづきの民兵で、みながみな射撃の名手、かれらは片手に櫓を、片手に銃をにぎり、人民解放軍と力をあわせて、祖国の海岸線をまもっています。

われわれには、つぎのような科学者、医務工作者が少なくありません。かれらはひじょうに崇高な精神をもち、科学上の難関を突破しようとうむことなく研究をつづけ、心をくだいて病人のために奉仕し、不治の病をなおそうとつとめています。たとえば、上海広慈病院の医師と看護婦

たちが火傷をした労働者丘財康の急を救った事蹟、第六人民医院の医師と看護婦たちが王存柏の切断された手をつなぎ合わせた事績――これらはみな世界の医学史上でもなかなか見られない先例であります。

雷鋒に学ぶ運動のなかで、各地に雷鋒のような人物、雷鋒のような「みじんも利己心をもたず、もっぱら他人の利益をはかる」という感動的な事績がたくさん現われています。たとえば、福州部隊通信部の用務員である共産党員張文根は、肥をくんでいた二人の人民公社員が肥だめに落ちこみ、いまにも命を失うというありさまを見て、自分が病気にかかっているのも忘れ、生命の安危を眼中におかず、その肥だめに飛びこみ、全身の力をふりしぼって二人を救いだしました。こうして、かれ自身も中毒にかかり、気を失ってしまいましたが、そののち応急手当てをうけてやっと危険状態から脱することができました。大衆はかれのこうしたおのれをすてて人を救うけだかい精神に感動して、かれこそ「毛主席のよい戦士」だ、といっせいにほめたたえました。上海市郵便物転送部市内運輸課の労働者高長富は結婚してまもなく、不幸にも妻の祁秀章が両眼とも失明してしまいましたが、ふたりとも貧しい家庭の育ちであり、喜びをともにし、苦しみをわかち合う階級的兄弟、姉妹であることを考えたかれは、妻をすてるどころか、いっそうかの女に同情をよせ、関心をもち、かの女をいたわり、その進歩を積極的にたすけました。これを

知った多くの人びともけだかい階級的な友情で、かれの妻を援助しました。上海第四師範学校がま夜なかに出火したとき、学生たちは危険をものともせず、全力をあげて消火にあたっただけでなく、自分の持ち物にはいっさいかまわず、身を挺して学校の物資を救出し、公共財産の損失を少なくしました。

大衆の社会主義的自覚がたえず高まるにつれて、ますます多くの人びとは社会の風習をあらため、社会主義の新しい気風をうちたてるたたかいに身を投じています。たとえば、上海普陀区錦繡里では、神仏を信心していた家が一二〇戸もありましたが、かれらは社会主義教育運動のなかで階級的自覚を高め、苦楽の根源がどこにあるかをさとり、迷信のカセからぬけだしました。いまでは百十数戸の家が自発的に迷信的な偶像をほおりだしたり、うちこわしたりしました。かれらは、「われわれは長年らい神仏にだまされてきたが、もうこれからは、こんなものにわれわれの子孫がわざわいされないようにしなければならない」といっています。またたとえば、徐匯区東廟橋路堂生里には労働者、職員の住んでいる家が八戸ありますが、一九五二年に共同で家をたて隣同士で暮らすようになってからこの八戸はまるで一家のように、ずっと団結し、援助し、関心をよせあい、質素をよびかけ、勤勉節約を旨として家事を切りまわしてきました。そこで、「生産の強固な後方」と人びとからほめられています。かれらはまた、つねに昔の苦しみを思い

おこして、今日の幸福な生活とくらべ、子供たちの心に昔の苦しみをしっかりときざみこみ、今日の幸福な生活を大切にするよう教育しています。また、かれらはどこででも自分の模範的な行動で、子供たちが労働を熱愛し、人を助けるのを喜びとし、ひろったものは落し主にかえすよう教育し、子供たちが身心ともに健康に育っていくようつとめています。

さきにあげたこのような新しい人物、新しい事物、新しい思想、新しい気風は、われわれのこんにちの社会主義社会では、いたるところに現われており、いたるところに伝わっています。ここにあげたのはそのいくつかの例にすぎません。もしわれわれの知っていることを、すっかり語りつくそうとすれば、数日、数夜をついやしてもつきないでしょう。ところが、われわれの知っていることには、やはり限度があります。現実の生活のなかでは、新しい人物、新しい事物ははるかに多く、たえず生まれているのです。要するに、新中国の勤労人民はいま天地をくつがえすような、前例をみない革命事業に従事しており、かぎりなく壮麗、雄大な史詩を創造しているのです。かれらは崇高な理想と革命的な感情をもっており、おう歌すべき英雄的な事績をつくっているのです。かれらの姿は、平凡でありしかも偉大であります。かれらのことを口にし、耳にするだけで、人の心をかきたて深く感動させます。われわれ革命的な演劇、文芸工作者が、どうしてこのような偉大な時代を思いっきりおう歌せずにおれるでしょうか。どうしてこのような偉大

な労農兵大衆を魂をこめて描かないでおれるでしょうか。どうしてこのような偉大な英雄的人物を表現しないでおれるでしょうか。われわれがこうしないでどうして飯がノドを通り、寝ることができるでしょうか。

ところが、こうした豊富多彩な生活、こうした崇高な英雄的人物を前にして、あるものは、かえって社会主義の現実の生活と闘争を反映する演劇は「テーマがせまく」「単純でひからびている」とか、労農兵の生活は「粗野で」「味がなく」、表現にあたいするものがなにもないなどと称しています。こうした見方が極端な誤りであることは明らかです。かれらの誤りは、つきつめてみると、立場の問題、態度の問題、感情の問題であります。現実の生活をえがくことを望まず、労農兵をえがくことを望まず、ここには劇としてのおもしろさがない、感情が豊かでないというのなら、ふるい時代の帝王将相、才子佳人をえがき、ブルジョアジーや小ブルジョアジーをえがき、鴛鴦蝴蝶のように「婉曲、纖細」で「てん綿たる悲哀」の感情をえがいてのみ、はじめてそこに劇としてのおもしろさがあり、人情味があり、味があり、豊かな感情があるとでもいうのでしょうか。われわれからみれば、いわゆる労農兵の「粗野」こそ革命にたいする確固さを表わしているのです。貴族や旦那がたの目でみるから、労農兵は「おろかで粗野」だと感じるのであり、いわゆる「纖細で複雑な」思想と感情に欠けていると感じるのです。プロレ

タリアートからみれば、搾取階級の感情こそこのうえなく粗野で低級なものであり、このうえなく腐りはてた野蛮なものであります。帝王将相、才子佳人については、ひとまずのべないとしても、ブルジョアジー、小ブルジョアジーには、現在表現するにふさわしいどんな肯定的なものがあるでしょうか。ブルジョアジーは、その上昇期においては、一定の進歩的な役割を果たしましたが、歴史の発展につれ、すでにその逆の面へ転化しています。搾取階級としてのブルジョアジーは、ひたすら私利を追求し、他人に損をさせて自己の利益をはかり、たがいにだましあい、腐敗堕落し、みだらな恥しらずな生活をおくっています。ブルジョアジーほど残酷で無情なものはありません。マルクス、エンゲルスは『共産党宣言』のなかで、こうズバリと指摘しています。ブルジョアジーは「人と人のあいだの赤裸々な利害、無情な『現金勘定』のほかには、どんなきずなも残さなかった。信仰の熱狂、騎士の感激、町人の感情という聖なる恍惚感を、氷のように冷たい利己的な打算の水におぼらせた。人格の品位を交換価値に解消させてしまった」と。ブルジョアジーのこうした人情味、こうした感情のどこに、描写するねうちがあるのでしょうか。もしわれわれがブルジョアジーを描かなければならないとすれば、けっしてそれをおう歌するのではなく、闘争を通じてそれを暴露することです。われわれがそれを描くのは、人民にそれを鑑賞させるためではなくて、それを批判し、それを逆の面からの教師とするためです。現在、わ

れわれのいちぶの青少年は、ブルジョアジーとはいったいどんなものなのか知っていません。ですから、このような脚本を少しばかり書いてみるのもいいでしょう。しかし、われわれは暴露のために暴露するのでもありません。それとは反対に、人びとにブルジョアジーのみにくい姿を認識させ、勤労人民の崇高さ、共産主義の偉大さを浮きぼりにし、断固としてブルジョアジーと闘争し、ブルジョア思想の影響を一掃するように人びとを教育し、ブルジョア分子を勤労者に改造するためです。小ブルジョアジーについていえば、それは不安定な、分化しつつある階級であり、その階級的地位からいえば、いかなる活路もないのです。小ブルジョアジーの思想は、ブルジョアジーの思想のカテゴリーに属するもので、本質的にはブルジョア思想にほかなりません。かれらがブルジョアジーにくっついて、ブルジョアジーに奉仕しないとすれば、かれらにはただプロレタリアートに降伏し、プロレタリアートの観点をうけ入れ、プロレタリアートに奉仕する道しか残されていないのです。小ブルジョアジーの感情は、空虚で、ぜい弱で、低級で、俗っぽいものです。かれらはつねに幻想から破滅へとすすんでいくものです。いちぶの人たちは、自分が小ブルジョアジーであり、小ブルジョアジーの思想、感情をもっているために、小ブルジョアジーの感情を好み、これこそ豊かな感情をもち、人情味をもったものといえると考えていますが、実際には、それも一種のブルジョアジーの感情にすぎないのです。プロレタリアートの感情

だけが人類のもっとも崇高で、もっとも偉大で、もっとも純潔な感情であり、それゆえ、われわれがもっともおう歌するねうちのあるものなのです。

社会主義社会においても、敵味方の矛盾は依然としてひじょうに先鋭であり、ひじょうに複雑であります。そこで敵味方の矛盾をえがいた劇では、わりあい容易に先鋭な劇的衝突が形成され、大衆が敵を認識し、敵味方の闘争を正しくおこなうのに助けとなります。これはだれでもかなり容易に解決できる問題です。人民内部の矛盾をえがいた劇については、劇的衝突を表現することができるかどうか、劇的衝突をたくみに表現することができるかどうか、こうした疑問をもつ人もまだ少なくありません。今回の新劇競演大会で上演されたいちぶのよい出しものは、われわれにためになる経験をあたえてくれました。いちばん大切な問題は、人民内部の矛盾にどのように対処するかということであり、どのような立場に立ち、どのような観点からそれを表現するかということであります。もしあなたがプロレタリアートの立場、観点から表現するなら、きっとりっぱに表現できるでしょう。もしその逆であれば、うまくいかず、現実をねじまげることになるでしょう。いちぶの人は、世界観が改造されていないために、しばしばブルジョアジーあるいは小ブルジョアジーの立場、観点から生活を観察しています。そのために、現実生活のなかの明るい面、積極的な面を見ることができず、たんに現実生活のなかの立ちおくれた面、消極的な

面だけを見ています。かれらは社会主義的な新しい人物、新しい事物、新しい思想、新しい気風をおう歌することに革命的な熱情を欠き、いわゆる生活の「暗い面」を「暴露」することにこのうえなく興味を感じています。かれらは現実の生活を反映したと自認していますが、実際には黒と白のみさかいがつかず、是と非とを転倒させているのです。かれらのいわゆる「暴露」はブルジョアジーの立場にたち、現実の生活をねじまげてえがいているにすぎないのです。もちろん、われわれも仕事のなかの欠点やあやまちを書いてよいし、欠点やあやまちのある勤労大衆を書いてもよいのです。しかし、それは人びとがそれらの欠点やあやまちから教育を受けるようにするためであり、「暴露」などというものではありません。この問題については、毛沢東同志が『延安文芸座談会における講話』のなかで、ひじょうにはっきりと、明快にのべています。「革命的な文芸家にとっては、暴露の対象は侵略者、搾取者、抑圧者、およびかれらが人民のあいだにのこしていった悪い影響だけであって、人民大衆であってはならない。人民大衆にも欠点はあるが、それらの欠点は人民内部における批判と自己批判によって克服すべきであり、こうした批判と自己批判をおこなうこともまた文芸のもっとも重要な任務の一つである。しかし、これは『人民を暴露する』などというべきではない。人民についていうならば、基本的には、かれらを教育し向上させる問題である」と。このほか、あるいちぶの同志たちは、頭のなかに小ブルジョア的幻想

をいっぱいつめこんだために、すべてをこのうえもなくりっぱで美しく、完全無欠だ、と思いこんでいます。しかし実際にふれたとたんに、目にしたものが自分のもともと想像していたのとちがっているので、表現にあたいするものがなにもないと言って、失望落胆してしまうのです。こうした同志たちは、実際にあわない幻想をすてて、実際から出発し、弁証法的唯物論の観点にもとづいて諸問題をみ、事物の主流と支流、現象と本質、成長しつつある新しいものと死滅しつつあるふるいものとを区別し、主流のもの、本質的なものをつかむことに長じ、たとえそれが萌芽状態にある新しく生まれた事物であっても、成長しつつあるものを見いだすことに長じなければなりません。階級的な観点で人民内部の矛盾を見、さまざまな人物、さまざまな矛盾を具体的に分析し、それを概括し、ねりあげ、心をこめて芸術的構想をねるなら、かならず人民内部の矛盾をひじょうに深く、そして適切に表現することができます。そうすることによって、人びとにそのなかから経験と教訓をくみとらせ、りっぱな教育をうけさせることができるのです。われわれはすでに人民内部の矛盾の反映を主としたすぐれた劇をたくさんもっています。それらのえがき方は随所に劇的衝突があり、ひじょうにドラマチックで、しかもひじょうに適切で、実際にぴったりあっています。この経験は、この問題にたいするいちぶの疑問に答えることができるものです。

このほか、抗日戦争いぜん、つまり三十年代の映画、新劇はたいへんよかったが、現在はかえ

って過去にはるかに及ばないようだ、という人がわれわれの華東地区にはいます。こうした見方もまったくあやまっています。一九四二年の延安文芸座談会いぜん、われわれには革命的な文芸運動があったでしょうか。たしかにありました。当時の革命的な文芸運動（ソビエト地区と反動派の統治地区をふくめて）は、かつて反帝、反封建の闘争のなかで、積極的な役割を果たしました。とりわけ中国人民の反帝、反封建闘争の高まりのなかで、魯迅のようなプロレタリアートの革命的文化の偉大な旗手が現われました。これは否定できません。毛沢東同志はこれに、きわめて高い評価をあたえています。しかし、当時の文芸工作の方向がまったく正しかったといえるでしょうか。当時の文芸工作者には、思想、認識の面で問題がなかったといえるでしょうか。そうはいえません。党中央と毛沢東同志が一九四二年に文芸座談会をひらいたのは、つまり文芸界では、二十年代にしろ、三十年代にしろ、あるいは四十年代初めに座談会がひらかれたときにしろ、この問題がはっきりしておらず、解決されていなかったからです。一九四二年に延安で文芸座談会がひらかれ、毛沢東同志が講話をおこなってから、革命的な文芸工作の方向の問題が解決され、プロレタリアートの革命的文芸ははじめて広びろとした大道をあゆみだし、正しい道にそって前進するようになったのです。そのときから二十二年このかた、毛沢東同志によって提起された文芸の方向に導かれて、革命がたえず深まり、発展するにともない、革命的な文芸は労農兵に奉仕

するという芸術的実践を通じ、たえず新しい成果をあげてきました。華東地区の文芸戦線で、いかなる部門、いかなる時期においてもつねに党の文芸路線が貫徹されてきたとはいえず、したがって早急に解決しなければならないさまざまな問題がまだのこされているとはいえ、いまではどの面からいっても、三十年代をはるかにしのいでいます。このことからもわかるように、こんにち分析もくわえないで三十年代の文芸を口をきわめてほめるのは、歴史的事実にあわないばかりか、一九四二年いらい毛沢東文芸思想に導かれておさめた成果を否定することになり、革命的な文芸を延安文芸座談会以前の状態にひきもどし、民主主義革命の段階に停滞させ、いつまでも社会主義の段階に進入させないようにすることにほかならず、それはまた毛沢東文芸思想の赤旗を高くかかげて前進する必要が全然ないということにほかなりません。これはわれわれの労農兵と人民大衆の許しえないことであります。

（三）社会主義時代には、かならずより多く、よりりっぱな、高度の思想性と高度の芸術性をもった演劇があらわれる

社会主義の演劇は、政治的内容の面で新しい水準に達することができるばかりでなく、芸術の

質的な面でも新たな高度な段階に到達することができます。これは時代の要求であり、歴史的な必然性であります。それでは、社会主義演劇の場合、どんな劇ならりっぱなものだといえるのでしょうか。毛沢東同志は『延安文芸座談会における講話』のなかで、「文芸批評には二つの規準があり、その一つは政治的規準であり、他の一つは芸術的規準である」とのべています。また、「政治はけっして芸術とは同じではないし、一般の世界観もまた、けっして芸術創作や芸術批評の方法と同じではない。われわれは、たんに抽象的な絶対不変の政治的規準を否定するばかりでなく、また抽象的な絶対不変の芸術的規準をも否定する。それぞれの階級社会におけるそれぞれの階級にはみな異なった政治的規準と芸術的規準がある。だが、いずれの階級社会におけるいずれの階級も、すべて、政治的規準を第一の地位におき、芸術的規準を第二の地位においている。……われわれの要求するのは、政治と芸術との統一、内容と形式との統一、革命的な政治的内容とできるだけ完成された芸術的形式との統一である。芸術性のとぼしい芸術作品は、政治的にどのように進歩していようとも、やはり無力である」とのべています。毛沢東同志はここで政治的規準を第一に、芸術的規準を第二にすること、および政治的規準と芸術的規準との間の弁証法的関係をひじょうにはっきりとのべています。われわれはすべての文学・芸術作品にたいし、さきにのべたような要求にもとづいて点検し、評価しなければなりません。プロレタリアートは政治

的規準にたいして、よりいっそう明確な要求をもっていなければなりません。また、プロレタリアートの演劇は、「革命的な政治的内容とできるだけ完成された芸術的形式との統一」に達するよう努めなければなりません。政治的規準にてらしていえば、毛沢東同志はかつて、抗日戦争当時の具体的な状況にもとづいて、具体的にこう指摘しています。「抗日と団結に利益をもたらし、大衆が一心同体となるようにはげまし、後退に反対し、進歩をうながすものはすべて、よいものであり、抗日と団結に不利益をもたらし、大衆が離反するようにあおり、進歩に反対し、人びとをうしろにひきもどすものは、すべてわるいものである」⑤と。社会主義の時期に、毛沢東同志は『人民内部の矛盾を正しく処理する問題について』という著作のなかで、また六項目の政治的規準を提起していますが、そのなかでは社会主義的改造や社会主義建設に役だつこと、共産党の指導を強化するのに役だつこと、この二項目がもっとも根本的なものとされています。この六項目の規準こそ、こんにちわれわれが演劇のよしあしをはかる政治的規準なのです。芸術的規準にてらしていえば、毛沢東同志は、「芸術性の比較的高いものはすべて、よいものであるか、比較的よいものであり、芸術性の比較的低いものは、よくないものであるか、比較的よくないものである。こうした区別をつけるには、もちろん、社会的効果をも見なければならない。文芸家のうちには自分の作品を美しいと思っていない人はほとんどいないし、われわれの批評にして

も、種々さまざまな芸術品の自由競走を許すべきである。だが、芸術科学の規準にしたがって正しい批評をおこない、より低級な芸術をより高級な芸術へとしだいに高めてゆき、広はんな大衆の闘争の要求に適合しない芸術を広はんな大衆の闘争の要求に適合する芸術にかえてゆくことも、まったく必要なことである」⑥と指摘しています。毛沢東同志は、この場合、けっして芸術の高級とか低級とか、よしあしを、なにか抽象的なものと見なしたり、架空なものと見なしたりしていません。毛沢東同志がくりかえし強調しているのは、プロレタリア芸術は大衆の闘争の要求によりよく適応し、プロレタリアートの政治によりよく奉仕することを、その目的としなければならないということです。毛沢東同志は一貫して、文芸問題の面では、かならず二つの戦線の闘争をすすめなければならないと主張し、政治的観点のあやまっている芸術作品に反対するとともに、政治的観点は正しいが芸術的には力のない「標語、スローガン式な」傾向にも反対してきました。

すぐれた作品が生まれるには、一定の社会的歴史的条件があって、個人の主観的願望によって完全に左右しうるものではありません。いかなるすぐれた作品もすぐれた作家も、みな時代の産物であります。わが国はいま、社会主義革命と社会主義建設の時期に入っており、党中央と毛沢東同志のマルクス・レーニン主義的指導があり、革命の旗じるしは鮮明であり、人民の闘志は

高く、社会主義事業はすさまじい勢いで発展し、社会の面貌は日ごとに改まっています。われわれのこうした豊富多彩で、いきいきとして活気にあふれた生活は、どの分野からいっても、すべて史上空前のものであります。このような基礎のうえに、きっとすぐれた革命的作家が生まれ、政治的内容の面にかぎらず、芸術の質の面においても、かならずすぐれた作品が現われるでしょう。これは時代の決定するところであります。ある人が筆をとらなければ、かならずほかの人が筆をとるにちがいないし、ある人がすぐれた作品を生みだせなければ、かならずほかの人がすぐれた作品を生みだすでしょう。またある作品がすぐれた作品にならなければ、かならずほかの作品がすぐれた作品となるにちがいありません。こんにち、帝国主義と資本主義諸国では、資本主義制度がもはや腐敗し、没落しているために、反動的なブルジョアジーの立場と観点にしがみついている文芸家ではよい作品を創作することは不可能であり、ブルジョアジーの腐敗し、没落した生活と意識を反映した作品しかつくれないのです。修正主義が権力をにぎっている国では、自分が革命をおこなわないだけでなく、他人にも革命をおこなうのを許さないため、反マルクス・レーニン主義の修正主義的作家も退廃的な、堕落した、空虚な、反動的な作品しか書けず、人びとの戦闘的意欲をむしばみ、資本主義復活のために道をひらいているのです。

いうまでもなく、社会生活が豊富多彩であるということは、ただすぐれた作品を生みだす客観

的条件にすぎません。すぐれた作品を生みだすには、やはり作家の主観的努力に待たなければなりません。もし作家が主観的努力をはらわず、なみなみならぬ労力をそそがなければ、いつまでたってもすぐれた作品は生まれてきません。一つのすぐれた作品を生みだすことは、大きな苦労をともなう創作実践の過程であり、われわれの作家が生活に深くはいり、生活をよく知り、自分の思想的水準と芸術的水準をたえず高める過程であります。とりわけ、演劇が広はんな大衆に迎えられるためには、なおさら大衆の意見にひろく耳をかたむけなければならず、上演の実践のなかで、たえず修正し、手を加え、向上をはかり、りっぱなうえにもりっぱにと努力しなければなりません。このようにしてはじめて大衆に喜ばれるすぐれた演劇にすることができるのです。

華東地区の新劇競演大会で上演されたすべての出しものは、みなくりかえし修正され、手を加えられたものばかりです。これらの出しものはこんごもひきつづきたえず修正し、手を加えることによって、日ごとに完成してゆき、レパートリーとならなければなりません。だが、いちぶの人は、社会主義の演劇という新しく生まれた事物が生まれたばかりのときにどうしても現われる、ある種の荒けずりの現象にたいして、熱情をこめて支持し、積極的な援助をあたえるという態度をとらず、いろいろとアラを捜し、難くせをつけ、いたるところで大げさにあれこれと非難し、わずかな欠点をほじくり出してさわぎたて、ある面だけをとりたてて攻撃してその他のよい面を無

視するというきらいがありますが、これは実際には、革命的な現代劇にたいして否定的な態度をとるものです。これは明らかに正しくない態度であります。では、現代劇を批判することは許されるかどうか。批判することが許されるばかりか、批判することは、現代劇をりっぱにするためにきわめて必要なことであります。しかし、われわれの必要としているのは誠意ある、建設的な批判であって、悪意のこもった、破壊的な批判ではありません。批判の態度が正しいものでありさえすれば、たとえまちがった批判であってもかまいません。われわれは、まだひじょうに荒けずりで、向上させなければならない現代劇が少なくないことをみとめます。これは、われわれが社会主義の演劇を発展させ、繁栄させる仕事のなかで、まじめに対処しなければならないことの一つです。われわれは、あの無責任な、一般化し、概念化した粗製乱造の演劇にたいしてもあくまで反対するものです。というのは、そのような演劇は社会主義の演劇の名誉をきずつけ、大衆に喜ばれないからです。しかし、われわれのいう向上とは、普及を基礎にした向上であり、労農兵に奉仕し、社会主義に奉仕するという方向にそった向上であって、労農兵大衆からかけ離れたいわゆる「向上」と称するもの、労農兵に奉仕することにそむき、社会主義に奉仕する方向にそむいたいわゆる「向上」ではないことを、ぜひ明らかにしておかなければなりません。

われわれの演劇工作者は、より多く、よりりっぱな社会主義の演劇を書きあげ、上演するため

には、徹底的に思想を改造し、長期にわたって労農兵大衆の生活のなかに深く入ってゆかなければなりません。なぜ、いちぶの人は、豊富多彩で、活気にみちた現実の生活に直面しながら、なんの作品も書きあげることができないのでしょうか。そのもっとも主要な原因は、この二つの根本的な問題を解決していないか、あるいはよく解決していないかであります。いちぶの人は、資本主義や封建主義の演劇の提唱やその脚本書きに熱中するが、なぜ、社会主義の演劇の提唱やその脚本書きには熱中しないのでしょうか。いちぶの新劇俳優は、外国の古典劇で、役につけないのをたいそうくやしがるのに、なぜ、現実の生活と闘争を反映した劇を演じることができないのを恥ずかしがらないのでしょうか。これはとりもなおさず、かれらの立場、態度に問題があり、思想、感情に問題があり、かれらにたいする資本主義、封建主義思想の影響がひじょうに根深いことをものがたっています。思想、感情がちがっていれば、愛や憎しみもちがってくるものです。もし思想改造をおこなわず、ふるい思想が自分の頭のなかをうずめつくしてしまうのにまかしておけば、ちょうどカゼをひいた鼻、色盲の目、ツンボの耳のように、ありあまるほどある新しい事物をかぎだすこともできなければ、見てとることもできず、はっきり聞きとることもできません。したがって社会主義の新しい人物、新しい事物、新しい思想、新しい気風を表現した劇を書くこともできないし、りっぱに演じることもできないのです。その他の分野の多くの同志

もふくめて、われわれのいちぶの演劇工作者はほかでもなく、真に生活に深く入ってゆくことができず、闘争に深く入ってゆくことができず、大衆から浮きあがり、実際からかけ離れています。このために、かれらの頭のなかにはふるいものがあるだけで、新しいものがないか、あるいは抽象的な新しいものしかなく、具体的な新しいものがないのです。もしこのままゆけば、たとえ自己改造をしようと決意し、よい作品を書きあげようと思っても、りっぱに改造することもできず、よい作品を書きあげることもできません。ですから、大衆の中へ深く入り、烈火のような闘争のなかへ深く入っていってはじめて、われわれの立場、態度、思想、感情を生まれ変わったように改造することができ、資本主義、封建主義の残渣を徹底的に一掃することができます。こうすれば、思想はいきいきとし、眼界はひらけ、知識は豊かになり、書くべきものもふえ、りっぱに書けるという自信も強まります。毛沢東同志は、「中国の革命的な文学者、芸術家、有為の文学者、芸術家は大衆のなかにはいらなければならず、長期にわたり、無条件に、全身全霊をうちこみ、労働者、農民、兵士大衆のなかにはいり、烈火のような戦いのなかにはいり、唯一の、もっとも広い、もっとも豊富な源のなかに入って、すべての人間、すべての階級、すべての大衆、すべてのいきいきとした生活形態と闘争形態、文学と芸術のすべての素材を、観察し、体験し、研究し、分析しなければならず、そうしてはじめて創作過程にはいることができるのである」

⑦とのべています。われわれ演劇工作者の一人びとりは、みな毛沢東同志のこの教えにしたがって行動しなければなりません。

われわれ演劇工作者は、より多くの、よりりっぱな社会主義の演劇を書きあげるには、さらに敢然とあらゆるふるい芸術的観念と徹底的に手をきり、敢然とブルジョアジー、封建階級の芸術のワクを打ちやぶらなければなりません。社会主義時代の豊富多彩な、いきいきとして活気にあふれた生活をあますところなく反映し、社会主義時代の労農兵の思想、感情を深く表現し、社会主義時代の先進的な人物をいきいきと形象化するためには、こんにちの要求にあわないふるくさい芸術のワクを打ちやぶらなければなりません。われわれのいちぶの演劇工作者は、長いあいだブルジョアジー、封建階級の芸術的観念の影響をうけてきたため、しばしば数多くのワクに縛りつけられて、これを突きやぶることができず、芸術改革での保守的な力となっています。マルクスとエンゲルスは『共産党宣言』のなかで、「共産主義革命とは以前から伝わってきた所有制の関係をもっとも断固として打ちやぶることにほかならない。したがって、その発展の過程で、以前から伝わってきたさまざまな観念をもっとも断固として打ちやぶることは、なんらあやしむにたりない」とのべています。われわれが社会主義の演劇を発展させ、演劇の改革をおこなおうとすれば、以前から伝わってきたブルジョアジー、封建階級の政治的観念と芸術的観念をもっとも断固として打ちやぶり、真のプロレタリアートの政治的観念と芸術的観念をうち立てなければなりません。

こういったからといって、それを内外の文学・芸術のすぐれた遺産をうけついではならないのだ、と理解していけないことはいうまでもありません。われわれはおよそ内外のすぐれたものはすべてうけつがなければなりません。問題はただ、うけつぐにあたって、正しい態度をとらなければならないということであります。われわれは歴史にたいする虚無主義者でもなければ、また遺産を盲目的に崇拝するものでもなく、歴史的遺産を批判的にうけつぐ態度をとるものです。こうしてはじめて、新しい、自分のものを創造することができます。レーニンは、「マルクス主義は、ブルジョア時代のもっとも価値ある成果をけっして拒否しなかったどころか、二千年以上におよぶ人類の思想と文化の発展における価値あるもののすべてを摂取し加工することによって、革命的プロレタリアートのイデオロギーとしての世界史的意義を獲得したのである。あらゆる搾取に反対するプロレタリアートの最後の闘争であるプロレタリアート独裁の実際の経験に励まされながら、この基礎のうえに、この同じ方向にむかってつづけられる将来の活動だけが、真のプロレタリア文化の発展とみとめられる」⑧とのべています。毛沢東同志も、「すべて外国のものは、われわれにとってちょうど食物と同様であって、自分の口でかみ、胃腸の運動をくわえ、そ

れに唾液、胃液、腸液をおくって、それをエキスとカスの二つに分解し、カスは排泄し、エキスは吸収すべきであり、そうして、はじめてわれわれの体に役だたせることができるのであり、けっしてナマのままで無批判に吸収してはならない」⑨と指摘しています。また、「われわれはすべてのすぐれた文学・芸術の遺産をうけつぎ、そのうちのすべての有益なものを批判的に吸収して、われわれが、そのときそのところの人民生活における文学・芸術の素材から作品を創造するさいの手本としなければならない」「うけついだり手本にしたりすることは、それを自己の創造にかえてよいということではけっしてない。これはけっしてとりかえることのできないものである」⑩とものべています。これはとりもなおさず、われわれはすぐれた文学的遺産にたいしては、批判的にうけつがなければならないし、しかもうけつぐということは、われわれが社会主義時代の現実の生活と闘争から出発して創造するための手本にすることであって、うのみにしたり、全面的にうけいれたりすることではありませんし、自分の創作ととりかえることは、なおさら許されません。内外の歴史には、十八、十九世紀のいちぶのすぐれた文芸作品のようにかつて封建主義、資本主義の罪悪をあばき、それなりの時代的意義をもつ多くのすぐれた文芸作品があることは認めなければなりません。しかし、これらの遺産はすべて、封建時代と資本主義時代のものであり、その基本的思想は道徳的観念をふくむ封建階級のイデオロギーを大いに宣伝し、ブルジョ

アジーの個人主義、民主主義、ヒューマニズムを大いに宣伝することであるという点をわれわれは見てとらなければなりません。これらのものは、プロレタリアートの社会主義思想と根本的に対立するものであり、これらとはもっとも断固として、もっとも徹底的に手をきらなければなりません。われわれは、演劇をふくむいっさいの文学・芸術遺産にたいして批判しなければならず、影響力の大きなものほど、より徹底的に批判しなければなりません。こうしてはじめて社会主義にたいし、またこんにちの人民にたいして有益な役割を果たすことができるのです。しかし、われわれのなかのいちぶの人は十八、十九世紀の文芸作品にたいし、このうえもなく崇拝し、心の底からほれこんで、すこしも分析、批判を加えようとしません。このように盲目的に遺産を崇拝することは、事実上、遺産の継承に名をかりて、封建主義、資本主義思想を宣伝しているのです。

芸術形式の面からいえば、いちぶのすぐれた古典的文芸作品には、独創的なところがあり、伝統的な演劇には長期にわたって形づくられた一連の演出形式があります。そこで、適当な条件のもとで、努力を重ねることにより、ふるい形式を利用し、ふるい形式を改造して新しい内容を表現することは可能なことであり、必要なことでもあります。しかし、内容と形式とのあいだには密接なつながりがあり、新しい内容はつねに新しい形式で表現されることを求めます。新しい内容がふるい形式を利用し、ふるい形式を改造して自己を表現したとき、ふるい形式はもはや純粋

のふるい形式ではなくて、ある意味からいっても、実際的にいっても、すでに新しい形式であるということができます。伝統的な出しものの演出形式は、ふるい時代の人物を演じるのに適合しており、適当な改造を経なければ、こんにちの新しい人物をりっぱに表現することができません。われわれがこんにちの労農兵を表現しようとすれば、こんにちの労農兵の形象、言語、動作がなくてはならないし、新しい形式を用いて演じなければなりません。ところが、これらのものを過去の文芸作品や演劇から捜しだすのはなかなかむずかしいことです。われわれが労農兵大衆のなかの英雄的人物を演ずるには、どうしてもその言語、動作、風格などを封建階級やブルジョアジーのわざとらしいしなや大げさな身ぶりに似せて処理するわけにはゆきません。内容の変化につれて、どうしても演出形式の面で古いものを突きやぶらなければなりません。昔から伝わってきたある種の芸術的技巧は、真剣に手を加えてのち、現代の人物を表現するのに用いることができますが、これはわれわれの軽視してはならない一つの面であります。しかし、主要なのはやはり、現実の生活のなかからこんにちの人物を演ずるのに適した芸術形式をねりあげることです。現実の生活のなかでの労農兵大衆の形象、言語、動作は、ねりあげ、手を加えることによって、ひじょうにりっぱな、ひじょうに美しい芸術形式にすることができます。これはつまり、演劇工作者は労農兵大衆とより深くむすびついたのち、さかんに現代ものを上演し、労農兵大衆を

表現するという芸術的実践のなかで、長期にわたる探求と経験の積みあげを経て、ついには社会主義生活を演ずるのにふさわしい新しい形式を捜しあてるだろうということです。そして、こうした新しい形式は必然的にいっそう民族化され、いっそう大衆化されたものになるということであります。だが、われわれのなかのいちぶの人は、できあいのワクから一歩も踏みだそうとせず、つきすすんで創造しようとする勇気がなく、いちずにナマのままもちこんだり、人まねをこととしています。毛沢東同志は早くからわれわれにこういましめています。「文学や芸術において、昔の人びとや外国の人びとのものを無批判的にナマのままもちこんだり模倣したりすることは、もっともみこみのない、もっとも有害な、文学における教条主義、芸術における教条主義である」⑪と。われわれの各種の演劇は、その内容から形式にいたるまで、すべて「陳(フル)キヲ推シテ新シキヲ出ス」、つまり封建主義、資本主義の陳きを推して、社会主義、共産主義の新しきを出さなければなりません。そうしなければ、政治的にだめになるばかりか、芸術的にも発展することができず、最後には、かならず時代と大衆から見捨てられるのをまぬがれることができません。

要するに、われわれは、前人ができなかったことを、われわれがやってみせるという自信をもたなければならないし、ふるいものの残りかすにしがみつき、昔を重視し今を軽視し、過去に

たいして迷信の念をいだいてはなりません。これは科学の分野でもそのとおりですが、演劇芸術の面でもまたそのとおりであり、その他のあらゆる事業においてもそのとおりであります。しかし、このことはわれわれが前進の途上で困難にぶつからないであろうし、社会主義の演劇は順風に帆をあげてすすむことができるという意味ではけっしてありません。社会主義演劇の建設は、長期にわたる、困難にみちた任務であり、社会主義の演劇そのものはかならず発展と完成の過程を経なければなりません。封建主義の文化・芸術にしても、資本主義の文化・芸術にしても、みな長期にわたる形成と発展の過程をたどってきたのです。中国の封建主義文化・芸術は、数千年の興亡史をつづっています。西欧諸国の資本主義文化・芸術の発展も、「ルネッサンス」の時代にはじまり、すでに数百年を経過しています。わが国では、社会主義文化・芸術は、わずかに十五年の歴史しかありません。そして、社会主義の演劇芸術は、なんといっても一つの新しい萌芽にすぎません。社会主義演劇を建設することは、それじしん偉大で、深刻な革命なのです。社会主義演劇にしっかりと陣地を占領させるには、封建主義、資本主義の毒素をふりまく演劇を徹底的に舞台からしめだし、われわれの脚本家、演出家、俳優、裏方が心をあわせて協力し、長期にわたる、なみなみならぬ努力と闘争をおこなう必要があります。われわれはけっして困難にぶつかってがっかりし、前進の勇気を失ってはなりません。われわれが正しい方向にそって、たえず

努力をかたむけ、たえず社会主義演劇の思想性と芸術性を高めてゆきさえすれば、われわれは、われわれの偉大な時代に恥じない演劇を創造することができ、舞台のうえにこのうえもなく輝かしい芸術の花を咲かせることができるのです。

（四）毛沢東文芸思想の赤旗をさらに高くかかげ、社会主義の演劇の発展と繁栄のために奮闘しよう

社会主義の全時期を通じて、国内的国際的階級闘争は、長期にわたる、複雑で、まがりくねったものであります。文芸は階級闘争の武器であり、時代のバロメーターです。階級闘争は必然的に文芸のうえに反映してきます。われわれの文芸が労農兵に奉仕するかしないか、社会主義に奉仕するかしないかということは、文芸戦線におけるきびしい、長期にわたる階級闘争であり、思想闘争であります。この闘争において、プロレタリア思想が陣地を占領しなければ、修正主義の思想がはんらんし、資本主義復活のために道をひらくことになります。社会主義の演劇が舞台を占領しなければ、資本主義、封建主義の演劇が舞台を占領し、社会主義革命と建設のなかでの障害となります。現在まだ二つの階級、二つの道の闘争が存在し、ブルジョア思想、封建思想がな

お存在していることをわれわれはつねに銘記していなければならず、一刻といえども階級闘争を忘れてはなりません。われわれの革命的な演劇・文芸工作者はすべて、毛沢東文芸思想の赤旗をさらに高く、さらにあざやかにかかげ、社会主義の演劇、文芸事業を建設するために最後まで戦かわなくてはなりません。われわれのすべての演劇・文芸工作者はみな、毛沢東思想をまじめに学び、毛沢東文芸思想を学ばなければなりません。まじめに学び、くりかえし学んで、ほんとうに身につけ、それによって認識を高め、思想を改造し、われわれの社会主義の演劇・文芸が毛沢東同志のさし示した方向にそって、さらに決然と勇ましく前進するようにしなければなりません。

毛沢東同志がうちだした文芸の方向を確固として実現していくためには、党の「百花斉シク放キ、陳キヲ推シテ新シキヲ出ス」方針を正しくつらぬき実行してゆかなければなりません。この方針は、わが国の演劇芸術の改革と発展のための根本方針です。実践は、この方針がまったく正しかったことを証明しています。この方針は、毛沢東同志が文芸は労農兵に奉仕しなければならないという方向にもとづいて提起されたものであり、また、文芸を労農兵によりよく奉仕させるためのものです。この方針は、わが国の文学・芸術の発展と繁栄をうながす方針です。これはけっして封建主義、資本主義の文学・芸術を保護する方針ではなく、またけっして、封建主義、資本主義の例の品を発展させるために利用されるのを許してはなりません。われわれは、社会主義

の方向のもとでの、芸術上異なった題材、異なった風格、異なった流派の自由な発展と自由な競争を許すだけであって、内容のうえで資本主義、封建主義を宣伝することは絶対に許せません。

社会主義の演劇を発展させ、繁栄させるためには、革命的な演劇家の隊伍を組織し、演劇家の隊伍の建設をつよめ、毛沢東文芸思想を正しく貫きとおすことのできる共産主義思想をもち、業務に精通した演劇・文芸家の隊伍を編成しなければなりません。脚本家、演出家、俳優、音楽関係者、舞台装置家をふくむ演劇・文芸工作者は、まず第一に、しっかりとしたプロレタリアートの革命戦士となる決意を固め、たえず自己を革命化していかなければなりません。演劇家隊伍の革命化の問題は、きわめて大きな問題であるとともに、また緊急に解決しなければならない切迫した問題でもあります。革命化とは、真のプロレタリア化であり、共産主義化であり、マルクス・レーニン主義と毛沢東思想によって自己の頭脳を武装することです。しかし、われわれの演劇家の隊伍をみると、かなり多くの人がまだ社会主義的な思想改造を完成しておらず、かれらの頭脳のなかのプロレタリア思想はまだほんのわずかしかありません。いちぶのものにはまだブルジョア思想ないし封建主義思想が相当根深くのこっています。しかも、かれらは毎日劇を演じ、宣伝をおこなわなければならないのです。したがって大衆にたいする影響はきわめて大きいのです。そこで一つ問題が出てきます。かれらはいったいどんな姿にもとづいて世界を改造しようと

するのか、という問題です。プロレタリアートの姿、社会主義の姿によってか、それとも資本主義、封建主義の姿によってか。毛沢東同志は、「小ブルジョア出身の人びとは、つねに、いろいろの方法で、そして、また文学・芸術の方法で、あくまでかれら自身をあらわしたり、かれら自身の主張を宣伝したり、小ブルジョア知識人の姿に似せて党を改造し世界を改造することを人びとに要求するのである。このような状況のもとでは、われわれの仕事は、かれらに大喝一声、つぎのようにいってやることである。『同志』諸君、諸君のそのやりかたではだめだ、プロレタリアートは諸君と折れあうことはできない。諸君にしたがえば、実際には、大地主・大ブルジョアジーにしたがうことであり、それは党をほろぼし、国をほろぼす危険がある、と。では、だれの姿に似せてやればよいのか？　プロレタリアートの前衛隊の姿に似せて党を改造し世界を改造するほかないのである」⑫と指摘しています。毛沢東同志のこのことばは、きわめて深い教育的な意義をもっています。教育する者じしんがまず教育をうけなければなりません。もしわれわれが自己のブルジョア的、小ブルジョア的な思想をまじめに改造し、プロレタリアートの革命的な思想をしっかりとうちたてるのでなければ、革命化を実現することは不可能であり、社会主義の演劇を真にわれわれの手でうちたてることも不可能となります。ですから、すべての革命的な演劇工作者はみな、わきたつような生活のなかに、烈火のような闘争のなかに身を投じ、社会主義革

命と建設の時期の労農兵とむすびつき、自己の立場、観点、思想、感情を徹底的に改造し、ブルジョアジー、小ブルジョアジーの個人主義、自由主義、名利をとうとぶ思想の名残りや、すべてのふるいイデオロギーとキッパリたもとを分かち、プロレタリアートの世界観を確立しなければなりません。そうすることによってはじめて、自分を、名実ともにしっかりとしたプロレタリアートの文芸戦士にすることができるのです。われわれの演劇工作者が労農兵と真にむすびつくかどうかは、かれらが真にプロレタリアートの文芸戦士になれるかどうかの重要な標識です。毛沢東同志は、「革命的であるか、革命的でないか、ないしは反革命的であるかのさいごの境界線は、かれらが労働者・農民大衆との結合を希望するかどうか、また、それを実行するかどうかにかかっている」⑬とのべたことがあります。これはわれわれ演劇・文芸工作者にも同様に適用されます。われわれのいちぶの演劇・文芸工作者は、旧社会出身のもので、搾取階級の家庭出身か、あるいはブルジョア教育をうけており、どうしてもなんらかの資本主義、封建主義の余毒に感染しているのであります。一方、われわれのいちぶの若い同志は階級的な搾取と抑圧の苦しみをなめたことがなく、階級闘争の鍛練と体験が不足しています。そのうえ、かれらのどちらも、つねに労農兵大衆とともに食事をし、ともに住み、ともに労働するということがあまりうまくやれておりません。そのため、かれらと労農兵大衆の思想、感情との間にどうしてもかなりの距離がよと

たわっているのです。かれらには自己を認識することが必要であり、自己の欠点を正視し、たえず自己を改造し、自己を鍛え、自己をたかめ、自己の思想、感情を徹頭徹尾、表裏ともに、労農兵大衆の側にきりかえることが必要です。こうしてはじめて、真のプロレタリアートの文芸戦士となることができるのです。また、こうしてこそはじめて、かれらは、真に社会主義を熱愛し、全身全霊をうちこんで社会主義の労農兵を表現し、社会主義の英雄的人物を熱情をこめてうたいあげ、高度な思想性と高度な芸術性をもった作品を書きあげることができるのです。

演劇家の隊伍の建設をつよめる点で、また創作家の隊伍の建設を重視することが必要であります。脚本の創作は社会主義の演劇を発展させ、繁栄させるうえでカギとなる問題です。脚本がなくては、社会主義の演劇の急速な発展はありえません。演劇工作の指導部門は、脚本創作を自己の第一義的な任務としてつかまなければなりません。演出家、俳優、裏方などのほかに、各地に精鋭な創作家の隊伍をつくりあげることが必要です。職業的な創作家は自己の重大な責任を認識して、自覚的に生活にふかく入り、脚本の創作に努力しなければなりません。それと同時にアマチュア演劇家の隊伍の育成にも特別な注意をはらい、アマチュア劇作家をみつけだし、これに援助をあたえ、職業作家とアマチュア作家の創作を結合するようにしなければなりません。アマチュア劇作家は各戦線にちらばって、現実のたたかいのなかに身を投じており、人数も多く、大

きな潜在力をもっていますので、もしわれわれが心から援助し、育成すれば、ゆるがせにできない一つの重要な勢力となるでしょう。

われわれの演劇家の隊伍には、社会主義に奉仕し、労農兵に奉仕しようと願うすべての文学者、芸術家、演劇家が含まれております。われわれはかれらを団結させ、かれらが進歩するよう熱情をこめて援助し、かれらの創作のためによい条件を提供しなければなりません。われわれの社会主義社会において、進歩を願うすべての文芸家は、革命闘争と芸術的実践の鍛練を通じて、たえず自己を改造するならば、かれらのなかの大多数の人びとが、祖国の社会主義革命と社会主義建設のために、社会主義の演劇・文芸のために、ふさわしい貢献をすることができるとわれわれは信じています。

革命的な演劇・文芸を建設し、革命的な演劇家・文芸家の隊伍を建設するためには、われわれは文芸界できびしい思想闘争をくりひろげなければなりません。文芸批評をつよめることはとりもなおさず、思想闘争をくりひろげる一つの方法であります。われわれは評論の仕事をつよめて、創作と演出を指導し、おしすすめ、創作と演出の経験を総括し、文芸面での思想闘争を展開しなければなりません。われわれはかならず革命的な文芸批評を発展させ、すべてのすぐれた、進歩的な、革命的な文芸作品を積極的に提唱し、支持し、激励し、いちぶのわるい、落後した、反

動的なものを批判しなければなりません。これは社会主義の演劇を発展させ、繁栄させるために欠くことのできない仕事です。華東の新劇競演大会は、公演を通じて、経験を総括し交流しあって、思想と認識をたかめ、「互いに比べ、学び、追いつき、助けあう」運動を展開して、大衆性をもった文芸批評といういきいきした方法をおしすすめました。これが社会主義演劇を発展させ、繁栄させる面で、ひじょうによい方法であることは事実が証明しており、今後も適当に採用してよいものです。

演劇にたいする党の指導をつよめることは、社会主義の演劇を発展させ、繁栄させるための根本的な条件であります。各級の党委員会はかならず演劇工作にたいする指導をつよめ、演劇家の隊伍にたいする思想政治工作をつよめ、演劇戦線での社会主義的改造と演劇工作者の思想改造を真剣におしすすめるとともに、それらを社会主義革命の重要な任務の一つとしてつかまなければなりません。この方面における社会主義革命をおろそかにしてはなりません。過去において、「創作にたいする指導者の干渉反対」という名目のもとに、党の指導の重要性を否定するものがありました。これはまちがいもはなはだしいもので、断固として反対しなければなりません。現代修正主義者は、文芸工作にたいするわが党の指導をとりわけあくどく攻撃しています。かれらは下心をもってこう言っています。現代劇は「すべて党組織の直接指導と参加のもとで書かれたものである」「ある劇作家が書いたというよりは……むしろ党委員会が書いたものだといった方がよい」と。かれらのこのような攻撃は、実際には、創作をマルクス・レーニン主義党の指導から引きはなして、かれら修正主義党の指導をうけいれるようにさせ、マルクス・レーニン主義の方向からそらして、かれらの修正主義の方向へ引きこもうとするかれらのわるだくみから出たものです。もしもかれらのペテンにかかったら、われわれの演劇・文芸は必然的に資本主義復活の道具となり、われわれの演劇・文芸工作者は修正主義の泥沼にはまりこむことになります。われわれはこのことを警戒し、演劇・文芸戦線における社会主義革命をかならず最後までやりとげなければなりません。われわれの演劇・文芸は革命闘争をおこなう武器であり、資本主義と封建主義の影響をくいとめ、逐次それを洗いきよめ、修正主義の侵食をふせぐ強力な武器であります。われわれの演劇・文芸は、かならず党の手中にしっかりとにぎられ、党の強固な指導のもとにおかれなければなりません。党の指導をつよめるためには、党は、社会主義にとって不利であり、人民にとって不利な創作にたいして「干渉」しないわけにはゆきませんし、かれらの創作気分を「こわさ」ないわけにはゆきません。毛沢東同志のつぎのことばはこのことをよく説明しております。「マルクス主義は創作気分をこわさないだろうか？　かならずこわすであろう。それは、あの封建的な、ブルジョア的な、小ブルジョア的な、自由主義的な、個人主義的な、虚無主義

的な、芸術のための芸術という、貴族的な、退廃的な、悲観的な、ないしはその他人民大衆のものでない非プロレタリア的な、さまざまな創作気分を決定的にうちこわすであろう。プロレタリア文芸家にとっては、こうした気分は、うちこわすべきかどうか？　うちこわすべきだとわたしは考える。それらは徹底的にうちこわすべきである。そして、うちこわすと同時に新しいものをつくりあげることができるであろう」⑭と。われわれのいう党の指導をつよめるということは、けっして修正主義が非難しているように、党が創作を一手にひきうけることではなく、いかに創作すべきかを正しく指導することです。実際の状況として、こんにちのこの偉大な社会主義時代においては、作家・芸術家個人の思想水準と見聞には結局のところ限度があります。党の指導は、時代の脈搏をとらえ、革命の動向を理解したものであり、政治面、思想面、あるいは、題材の選択の面から、作家・芸術家を援助することは、作家・芸術家の積極性、創造性をそこなわないどころか、かれらが思想をたかめ、方向をはっきりさせるのに役立つのです。事実、党の明らかにした方向にしたがい、大衆の闘争と生活の豊富な経験をあますところなく汲みとり、大衆の意見と要求をまじめにききとってこそはじめて、社会主義の生活と闘争を成功裏に反映した演劇を生みだすことができるのです。

当面の国際、国内情勢はひじょうにすばらしいものです。演劇・文芸工作者は時代の潮流にお

いつき、社会主義の新しい演劇、新しい文芸の建設と発展を速めなければなりません。われわれの革命的な演劇・文芸は中国革命に奉仕しなければならないだけでなく、世界の革命的な人民にも奉仕し、プロレタリア国際主義の果たすべき任務をになわなければなりません。われわれのすべての演劇・文芸工作者は革命の大きな志をいだき、遠大な理想をうちたてて、毛沢東文芸思想の赤旗を高らかにかかげ、演劇・文芸という武器によって、帝国主義、各国反動派、現代修正主義に反対する中国人民および世界人民のたたかいを支持し、はげまし、共産主義の完全な実現のために奮闘しようではありませんか！

注

① 「新民主主義論」、『毛沢東選集』中国語版第二巻
② 「党の組織と党の文学」、『レーニン全集』第十巻
③④⑤⑥⑦ 「延安文芸座談会における講話」、『毛沢東選集』中国語版第三巻
⑧ 「プロレタリア文化を論ず」、『レーニン全集』第三十一巻
⑨ 「新民主主義論」、『毛沢東選集』中国語版第二巻

⑩⑪⑫ 「延安文芸座談会における講話」、『毛沢東選集』中国語版第三巻
⑬ 「五・四運動」、『毛沢東選集』中国語版第二巻
⑭ 「延安文芸座談会における講話」、『毛沢東選集』中国語版第三巻

現代もの京劇競演大会開幕式でのあいさつ

（一九六四年六月五日）

陸　定　一

同志のみなさん、友人のみなさん

一九六四年度の現代もの京劇競演大会がきょうからひらかれます。このように大がかりな現代もの京劇競演大会は今回がはじめてであります。これは京劇界および演劇界にとって革命的な意義をもつ大きなできごとであります。わたしは大会の開幕を熱烈にお祝いするとともに、今回の競演に参加された各地の演劇工作者とこの競演の促進に努力された各方面の関係者に、心から敬意を表します。みなさんが今回の競演を通じて、たがいに学び、たがいに経験を交流し総括して、現代もの京劇という革命の花をよりいっそう盛んに咲かせられるよう希望してやみません。

社会主義の文芸は労農兵に奉仕しなければなりません。わたしたちの演劇は「百花斉(ヒト)シク放(ヒラ)キ、陳(フル)キヲ推シテ新シキヲ出ス」というものでなければなりません。この方針は、みなさんがすでに知っておられるとおりであります。全国が解放されていらい、京劇界も大きな進歩をとげま

した。京劇の内容は比較的健全になり、演出芸術においても少なからず改善され、大多数の京劇工作者の政治的水準は高まり、献身的に観衆と国家に奉仕し、国内外でひじょうに大きな名声を博しました。先輩の教育と指導のもとに、京劇の新生勢力が養成されてきています。

社会主義社会は階級闘争の存在する社会であります。このような階級闘争は文化の分野に反映してきますし、京劇工作にも反映してきます。十五年らい、京劇工作の中で、同じようなことがなん度となくくりかえされました。みなさんも記憶しておられるように、一九五七年、ブルジョアジーが気違いじみた攻撃をくわえてきたとき、いちぶの人びとは有害な出しものをふたたび舞台にもちこみました。これは実際には、社会主義にたいするブルジョアジーと封建勢力の気違いじみた攻撃の一部分であります。さいきん、わが国が三年つづきの大災害にぶつかり、フルシチョフをかしらとする現代修正主義者が専門家を引きあげ、契約をやぶり、インド反動派が西南辺境で軍事的挑発に出、アメリカ帝国主義の庇護のもとにある蔣介石一味が「大陸反攻」をわめき、地主、富農、反革命分子、ブルジョア右派分子もこの機に乗じて盛んに活動していたとき、京劇の舞台にもふたたび多くの怪談ものや悪い劇があらわれました。それは北京にも、他の都市にもあらわれました。怪談ものは都市にもあらわれたし、農村にもあらわれました。怪談ものがでてくると、封建的な迷信の台頭をうながします。これはブルジョアジーと封建勢力が社会主義にく

わえたいま一度の気違いじみた攻撃であります。当時、演劇界のいちぶの人びとはこの情勢をはっきりと見きわめることができず、いわゆる「お化け無害論」にだまされましたが、いまこそ教訓をくみとって自覚しなければなりません。

同志のみなさん、友人のみなさん、みなさんが知っておられるとおり、現在わが国の経済はすでに全面的に好転しました。わたしたちはなぜこんなに早く困難をのりきることができたのでしょうか。それは、わたしたちが早くから社会主義社会にも依然として階級闘争が存在することを認識していたからであり、だんこ労働者階級と貧農、下層中農に依拠するとともに、社会主義に賛成し擁護するすべての勢力と団結して、各戦線でだんことして闘争をすすめてきたからであります。毛主席が一九五七年に著わした『人民内部の矛盾を正しく処理する問題について』という著作は、わたしたちがわが国の状況を正しく認識するようみちびき、正しく闘争をすすめるようみちびく理論的基礎であります。毛主席のことばにしたがって事を処理したおかげで、わたしたちは困難をのりきることができたのであります。

毛主席はわたしたちに、社会主義社会は「全人民の国家」などというものではなく、階級と階級闘争の存在しない社会ではない、と教えています。社会主義社会にはなお、生産力と生産関係との間の矛盾、上部構造と経済的土台との間の矛盾が存在しており、ブルジョアジーとプロレタ

リアートとの間の階級闘争も存在しています。これらの矛盾には、人民内部の矛盾と、敵味方の矛盾という二つの異なった性質の矛盾があり、人民内部の矛盾が大量に存在しています。この二つの矛盾にたいしては、性質を明らかにし、それぞれちがった方法で解決しなければなりません。社会主義社会での階級闘争は高くなったり、低くなったり、ときにはひじょうにはげしいものになったりします。社会主義から共産主義にいたるまでの時期は、きわめて長い歴史的時期となるでしょう。この時期には、資本主義復活の危険性がずっと存在しています。

現代修正主義者はいま、資本主義復活のために道をきりひらいています。つまり、アメリカ帝国主義者の希望する「平和的転化」のために道をきりひらいているのです。現代修正主義者の出現は帝国主義を有頂天にさせました。帝国主義はわが国にも将来、「平和的転化」がおこることを夢みています。わが国のブルジョア右派分子は帝国主義や現代修正主義者と口うらを合わせて同じことをとなえ、「窮スレバ則チ変ジ、変ズレバ則チ通ジ、通ズレバ則チ富ミ、富メバ則チ修タリ」といっています。かれらはこうしたじゅ文をとなえることによって、わが国に資本主義がかならず復活すると、人びとに信じこませようとたくらんでいるのです。このような状況に直面して、わたしたちは、すすむべき方向をはっきりみきわめ、仕事に精をだし、わたしたちのつぎの世代に修正主義が出ないよう保証し、資本主義がわが国で永遠に復活できないよう保証しなけ

ればなりません。

演劇は、上部構造のカテゴリーに属するものであります。上部構造は経済的土台に適応しなければなりません。社会主義の演劇は、社会主義革命と社会主義建設に奉仕するものでなければなりません。革命的演劇工作者のもっとも大きな、もっとも光栄な責任は、わたしたちの現在の世代を教育するとともに、わたしたちの子孫の世代が永遠に革命家として、色あせず、帝国主義とその手先に反対し、ブルジョアジーと封建勢力に反対し、現代修正主義と現代教条主義に反対し、共産主義の遠大な理想を実現するために、最後までたたかいぬくよう教育することであります。

京劇が帝王将相、才子佳人しか演じないならば、社会主義の経済的土台に適応しないことはきわめて明白であります。また労農兵に奉仕するとか、「百花斉シク放キ、陳キヲ推シテ新シキヲ出ス」は、みな空文句になります。

わたしたちはこれまで、いちぶのすぐれた伝統的な出しもの、たとえば『三国誌』や『水滸伝』、『楊家の将軍』などに取材した京劇の上演に反対したことはありません。またいちぶのすぐれた神話劇、たとえば《大鬧天宮》（天宮を大いにさわがす）、《三打白骨精》（白骨の精を三たび退治する）などの上演に反対したこともありません。わたしたちはまた史的唯物論の観点

に立って、いちぶの教育的意義のある歴史劇、とりわけアヘン戦争いらいの近代の歴史劇を新しくつくるよう提唱してきました。しかし、これだけではまだ不充分です。京劇は、あざやかな革命の花、つまり五・四運動いらいの革命闘争の事績を表現し、全国解放いらいの階級闘争と生産建設を表現した現代ものという花を咲かせなければなりません。こういった意味で、今回の競演は、ひじょうにみごとなスタートであり、きわめて喜ばしいことがらであります。京劇工作者は解放軍に学び、雷鋒（レイフォン）に学び、大慶（ターチン）に学び、大寨（ターザイ）に学んで、困難な仕事にとりくみ、京劇の芸術形式を利用し、発展させ、またそれをのりこえて、多くの人びとが不可能だと思いこんでいたことを現実にかえ、現代の人物を京劇の舞台に登場させました。同志のみなさん、友人のみなさん、わたしはここで、あらためてみなさんのなみなみならぬ努力に感謝の意をあらわしたいと思います。

こんなにすばらしいできごとに反対する人がいるでしょうか。将来、京劇工作の中でまた同じようなことがくりかえされるでしょうか。反対する人がいるということはまちがいありません。また同じ問題にぶつかるであろうということも事実です。なぜなら、これは究極のところ階級闘争であるからです。

帝国主義者と現代修正主義者は現在すでに現代もの京劇をひどくののしっています。かれらは

京劇を目にしたこととさえないのですが、階級的本能から、ののしっているのです。かれらがののしれば、わたしたちは喜びます。なぜなら、それは、わたしたちのあゆんでいる道が正しいことを証明しているからです。わたしたちがこの道をあゆむことは、帝国主義者と現代修正主義者にとっては不利になるのです。もしかれらにとって不利になるのでなければ、どうしてかれらはわたしたちをののしるのでしょう。問題の根底はつぎのことにあります。つまり、かれらがわたしたちの芸術がかれらと同様、堕落と腐敗の方向に発展するようのぞんでいるのに、わたしたちがこれに反してもっぱら革命的で健全な方向に向かって発展しているということです。わが国は六億五千万の人口をもち、世界人口の四分の一を占めています。このように人口の多い国で、社会主義の革命的文芸が栄えるのですから、これは帝国主義の旦那がたにとって、たいへんおそろしいことではないでしょうか。わたしは、帝国主義者や現代修正主義者が現代もの京劇をののしっている資料を、一冊の本にまとめ、競演に参加された方がたぜんぶに配布して、見ていただくよう文化部に提案します。そして、わたしたちの仕事が、国内で意義があるばかりか、国際的にも意義があることをみなさんに知ってもらいたいと思います。

帝国主義者と現代修正主義者は、現代もの京劇は「まったくむちゃだ」といっています。わたしたちはこれとは反対に「たいへんすばらしい」といいます。現代もの京劇は革命的精神で観衆

を教育しています。これがすばらしいという第一の理由です。京劇の俳優は現代ものを演じたおかげで、自分の精神的面貌をもさらに改め、労農兵に学び、労農兵と結びつきました。これがすばらしいという第二の理由です。現代もの京劇は、各地で上演され、多くの観衆をひきつけ、熱烈な歓迎をうけました。これがすばらしいという第三の理由です。つまり、たいへんすばらしいということなのです。

現代ものを演じた京劇の俳優は、自分の実践を通じて、どうしても労農兵のなかに入っていかなければならないということ、どうしてもかれらの崇高な品性を学ばなければならないということ、どうしてもかれらがなにを喜び、なにに反対しているかを知らなければならないということを理解するようになりました。これこそ京劇界におこった天地をくつがえすような革命化であるといえます。京劇工作者は、ふるい世代のものであろうと、新しい世代のものであろうと、みな自覚的に自分を革命化し、また革命化を堅持し、自分を鍛え、階級闘争の激流のなかで、足をしっかりとふみしめ、永遠に敵に降伏せず、永遠に修正主義者にならず、永遠に逃亡兵にならないようにしなければなりません。脚本家、演出家をはじめすべての関係者、主役からわき役まで、すべての京劇工作者が、党と毛主席のよびかけに熱烈に呼応して、労農兵のなかにはいり、階級闘争と生産闘争のなかにはいって、自己を改造し、社会主義の演劇工作をりっぱにすすめ、社会

主義の偉大な事業のために貢献されるよう希望します。

現代もの京劇のまえにはひじょうに広びろとした前途がひらかれています。こんどの競演では、上演される出しものはまだあまり多くありません。そのうちのあるものは比較的洗練されたものですが、いちぶにはまだ手をくわえる必要のあるものもあります。このような競演は、こんごともおこなわなければなりません。なん年かに一度ひらくとよいでしょう。しだいに経験をつみ、一歩一歩前進することによって、将来数百もの現代もの京劇のすばらしい出しものが全国各地で上演されるよう希望します。わたしたちは、自分の仕事の意義を知り、仕事のやりかたを知ったのですから、かならず成果をあげることができるでしょうし、将来もっと大きな成果をあげることができるでしょう。

競演大会にさきだって成功をお祈りいたします。

同志のみなさんと友人のみなさんの健康を祈ります。

文化戦線における大革命

（一九六四年第十二号『紅旗』誌社説）

京劇の改革は大きなできごとである。それは文化革命であるばかりでなく、社会革命でもある。今回北京でひらかれた革命的な現代もの京劇競演大会を手はじめとする京劇の改革、およびこれにつづく演劇、芸能、映画、文学、音楽、舞踊、美術など文学・芸術の各方面のいっそうの革命化は、わが国の文化、思想の分野における社会主義革命の重要な構成部分となっている。

今回の競演大会では数多くの革命的な現代ものが上演された。一般的にいって、これらの劇の思想的内容はすぐれており、そのうちのあるものはひじょうにすぐれており、数多くの輝かしい英雄的人物の形象を創造し、その演技にもいくつかの新しい独創がみられ、京劇芸術の特徴がいかされている。革命的な現代ものをうまく演ずるために、いちぶの俳優は労農兵大衆のなかにはいるうえで、ひじょうに大きな努力をはらった。このほか、いま労農兵大衆のなかへはいろうと準備している人も少なくない。これらすべては、毛沢東文芸思想の光に照らされて、革命的な現

代もの京劇が社会主義、共産主義思想で観客を教育し、それに影響をあたえる面で第一歩をふみだしたことを示している。われわれは京劇界の成果をまえにして、かれらに祝賀の意を表さなければならない。

早くも一九四二年に、毛沢東同志はこう指摘している。文芸は「だれのためかという問題は、根本的な、原則的な問題である」「われわれの文学・芸術はことごとく人民大衆のためのもの、まずなによりも労働者、農民、兵士のためのものである」①と。労農兵に奉仕すること、これはわれわれの確固不動の方向である。社会主義の文芸が労農兵に奉仕することは、つまり社会主義革命と社会主義建設に奉仕することであり、搾取階級とその思想的影響を一掃するためにたたかうことである。文芸の分野において、演劇はとりわけ大衆性にとむ芸術形式の一つであり、京劇は広はんな愛好者と観客をもっている。したがって、その他各種の文芸形式と同様、京劇がどんな思想で大衆を教育し、どんな感情で大衆に影響をあたえるかは、原則的意義をもつ大きな問題である。

社会主義制度は歴史上のすべての搾取制度にくらべて、比類のない優位性をそなえている。社会主義社会は生産手段の私的所有制を廃止し、生産手段の共有制をうちたて、人が人を搾取する制度を一掃し、プロレタリアート独裁をうちたて、人民を国家の主人公にしあげた。しかし、社

会主義社会は依然として階級と階級闘争の存在する社会である。社会主義から共産主義への歴史的時期ぜんたいにわたり、依然としてプロレタリアートとブルジョアジーの二つの階級の闘争、社会主義と資本主義の二つの道の闘争が存在している。プロレタリアートが終極的にはブルジョアジーにうち勝ち、社会主義が終極的には資本主義にうちかって共産主義にはいっていくというのが歴史の全般的法則である。しかし、社会主義という歴史的段階では、階級闘争に起伏があり、資本主義復活の危険性が存在している。資本主義の復活は暴力の形態あるいは「平和的転化」の形態をとる可能性があり、また二つの形態がたがいに結びつく可能性もある。帝国主義や地主、ブルジョアジーは暴力を用いるばかりでなく、しばしば「糖衣でくるんだ砲弾」という政策を用いたり、修正主義を利用して、こっそりと社会主義を一歩一歩資本主義に変質させようとねらっている。この目的を達するために、かれらはまた、つねに百方手をつくしてプロレタリアートと思想的陣地を奪いあい、反動的な政治思想の影響をまきちらし、ブルジョア的生活様式をおしひろめて、共産主義者、プロレタリアート、その他の革命的人民を毒し、軟化させ、思想面から反革命の復活に条件をととのえ、そのための道をきりひらこうとしている。

これは深刻な階級闘争である。

この闘争のなかで、文芸は重要な争奪点の一つであり、文芸の重要な一部門としての演劇もそ

の例にもれない。フルシチョフを代表とする現代修正主義の文芸（かれらの演劇をふくむ）のなかから、かれらが盛んにブルジョアジーの人性論、ヒューマニズム、平和主義などをまきちらし、やっきになって革命に反対し、プロレタリアート独裁を攻撃し、社会主義制度を戯画化していること、またかれらが「新奇」をてらうアメリカ帝国主義の腐敗、堕落した芸術を売りこみ、アメリカ的生活様式を宣伝し、種々さまざまな腐敗した下品で反動的なしろものを用いて、社会主義国の人民大衆、とくに若い世代を毒し、その思想を堕落させ、意気を消沈させ、道徳を破壊させようとしていることを、われわれはすでに見てとっている。現代修正主義の文芸は人民大衆の革命的意志をすりへらし、むしばむ文芸であり、帝国主義の要求にこたえて、帝国主義の「平和的転化」政策の労をとり、資本主義復活の労をとる文芸である。

したがって、社会主義社会においては、文芸がどの階級の思想的陣地であるか、どのような思想を宣伝しているかは、文芸そのものが革命性をもっているかどうかという問題、文芸が発展の見通しをもっているかどうかの問題にかかわるばかりでなく、さらに社会主義の政治制度と経済的土台が強固になりうるかどうか、発展しうるかどうか、変質するおそれがあるかどうかの問題にもかかわっているのである。もしわれわれの社会主義社会の文芸がプロレタリアートの思想を宣伝せず、労農兵の革命的精神を熱情的に表現し、新時代の英雄的人物の気高い品性を表現する

のではなく、逆に資本主義、封建主義の思想をまきちらすならば、それは社会主義文芸になりえないばかりか、それがひろめた反動的な腐敗した思想は人民大衆、とりわけわれわれのつぎの世代にたいして、きわめて大きな腐食作用をおこし、資本主義勢力と封建勢力に有利な結果をもたらさざるをえない。うたがいもなく、こうした社会主義からはなれ、社会主義に反対する文芸は、われわれの絶対に許すことのできないものである。

社会主義革命と社会主義建設の発展につれて、政治思想の分野における社会主義革命をさらに深くすすめる必要がある。上部構造の一構成部分としての演劇も、それに相応してプロレタリア思想を盛んにし、ブルジョア思想を一掃し、社会主義と共産主義を宣伝し、社会主義に直接に奉仕することをみずからの第一義的な責務とする必要がある。このことはつまり、京劇芸術に「陳キヲ推シテ新シキヲ出ス」という方針にもとづき改革をおこなわなければならないことを要求しているのである。「陳キヲ推シテ新シキヲ出ス」とはどういうことか。これはつまり、資本主義、封建主義の陳きを推して、社会主義、共産主義の新しきを出すということである。また社会主義時代に適した新しい内容がなくてはならないばかりか、社会主義時代に適した新しい形式もそなえていなければならないということである。現代の闘争生活を表現する、革命的な内容と形式のいずれにも新しい創造性のある現代ものが、京劇の舞台で主要な地位を占めなければならな

いし、その他の劇の舞台でも主要な地位を占めなければならない。こうしてこそ、われわれの演劇舞台というこの重要な思想的陣地は、真にプロレタリアートの思想的陣地となることができるのである。

時代が前進した以上、文芸の内容もそれにともなって改められなければならない。帝王将相、才子佳人によって占められている舞台でも「プロレタリア思想を盛んにし、ブルジョア思想を一掃する」闘争任務に奉仕することができるなどとは考えられないことである。たとえ、いくつかの伝統的な出しもののなかにそれぞれちがった度合で進歩的思想がもられているにしても、それはとうてい勤労大衆の要求を満足させることはできず、人民にたいして社会主義的思想教育をほどこすことはできない。封建的残滓をふくんでいる悪い劇などはなおさら有害無益なものであり、きっぱりと投げすてなければならない。このまえまで、いちぶの人は演劇舞台で怪談ものの上演を盛んにわめき、妖怪へんげを提唱し、またいわゆる「お化け無害論」を提起して、封建的迷信をひろめる怪談ものを弁護した。これはひじょうに有害であり、文芸の分野におけるブルジョアジーと封建勢力の社会主義にたいする攻撃の反映である。それは人民の政治的自覚を高めるうえでひじょうに不利であり、社会主義制度の強化、発展に不利である。封建主義、資本主義思想をまきちらす文芸は、けっしてプロレタリアートの政治に奉仕することはできず、社会

主義の経済的土台に奉仕することはできず、ただそれにたいして妨害と破壊の役割をはたすだけである。

ここで、われわれは一つの先鋭な問題を提起する。プロレタリアートとブルジョアジーの二つの階級の闘争のなかで、社会主義と資本主義の二つの道の闘争のなかで、われわれの文学・芸術ははたしてどちらの側に立つのか。プロレタリアートと貧農、下層中農の思想、感情を反映するのか、それとも資本主義勢力と封建勢力の思想、感情を反映するのか。人口の圧倒的多数をしめる労農兵に奉仕するのか、それとも少数の搾取階級分子に奉仕するのか。毛沢東同志が早くから提起したマルクス・レーニン主義の文芸路線を実行するのか、それとも現代修正主義のそれを実行するのか、と。指摘しておかなければならないことは、わが国の文芸戦線において、ある同志はこの問題を真に解決しているが、ある同志はまだ解決していないかあるいは完全に解決していないということである。わが国の社会主義革命と社会主義建設はすでに十五年の歴史をもち、わが国の勤労人民は各戦線で歴史的な奇跡をつくりあげた。それにもかかわらずいちぶの文芸工作者は、それにそしらぬふりをし、情熱に欠け、この闘争をおう歌し、反映することなどぜんぜん望まないかあるいは努力しようともしない。反対に、かれらは資本主義、封建主義の文化にみれんをいだき、なおも「象牙の塔」にひきこもり、どうしても労農兵大衆のなかへはいろうとせ

ず、烈火のような闘争のなかへはいろうとしない。かれらの魂の奥底はあいかわらずブルジョアジーの王国であり、たえず頑強に自己を表現しようとし、自己の世界観で世界を改造しようとはかっている。そのうちのごく少数のひとはすでに腐敗しはじめ、堕落変質してしまっている。また他のいちぶの人は搾取階級の側に立ったままでいる。これは許すことのできない事態であり、かならず改めなければならないことである。

わが国の社会主義革命と社会主義建設の進展にともなって、革命的大衆文化運動が盛んになってきた。かれらは革命的演劇、革命的歌曲、革命的舞踊、革命的映画、革命的詩歌、革命的小説、革命的美術を切実に求めている。これらの面で、広はんな労農兵大衆はすでにみずから手をくだして仕事をはじめている。広はんな人民大衆はいま、革命的文芸で反動的文芸をうちくだいている。こうした状況をまえにして、われわれの文芸工作者はどんな態度をとるべきであろうか。いちぶの同志は労農兵大衆のなかにはいり、人民大衆とともに文化革命をすすめはじめている。こうして、かれらの面目はすっかり一新し、活気にみちあふれ、文芸という武器を用いて社会主義の闘争生活を反映し、社会主義に奉仕し、そうすることによってまた大衆から歓迎されている。かれらは社会主義の思想的陣地を奪いとる面で貢献している。今回の京劇革命の現代もの競演のなかで、広はんな観客からかっさいをあびたいちぶの俳優がいることはこの点を裏づけ

ている。しかし、文芸家の隊伍ぜんたいを通じて、このようにしていない人びとがまだ少なからずいるということを指摘しないわけにはいかない。こうした革命的大衆文化運動にたいして、あくまで腰をあげようとせず、さらにはそれに反抗の態度すら示す人がいる。だから、われわれは声を大にしてこうよびかけねばならない。かならず毛沢東同志の文芸方針をだんこ実行し、労農兵大衆のなかへはいり、烈火のような闘争のなかへはいり、文芸という武器を用いて、プロレタリア思想を盛んにし、ブルジョア思想を一掃し、社会主義の思想的陣地を拡大し、資本主義の思想的陣地をうちくだかねばならぬ、と。これこそわが国で社会主義革命を徹底的にすすめてゆくためのもっとも重要な任務である。

文学・芸術を革命化するうえで、もっとも重要で、もっともカギとなる問題は、文学・芸術工作者自身の革命化の問題である。毛沢東同志はわれわれにつぎのように教えている。「革命的な文学者、芸術家、有為の文学者、芸術家は大衆のなかにはいらなければならず、長期にわたり、無条件に、全身全霊をうちこみ、労働者、農民、兵士大衆のなかにはいり、烈火のような闘争のなかにとびこまなければならない」②と。これはわれわれすべての文芸工作者が革命化をめざしてすすむ根本的な道である。

革命的文芸家はなによりもまず革命戦士でなければならない。もし労農兵大衆のなかにはいら

ず、烈火のような闘争のなかにとびこんで真剣に自己を鍛え、自己を改造しないならば、革命的精神、革命的感情を身につけることは不可能であり、革命的な生活を反映することに情熱をうしない、文芸が労農兵に奉仕し、社会主義に奉仕し、世界の革命的人民に奉仕することになんらの関心ももたなくなり、それを自分にとっての切実な事業とみなすことができなくなる。

毛沢東同志はのべている。「イデオロギーとしての文芸作品は、ことごとく一定の社会生活が人間の頭脳に反映して生まれたものである。革命的文芸は、人民の生活が革命的作家の頭脳に反映して生まれたものである。人民の生活のなかには、もともと文学・芸術の素材となる原鉱が存在している。これは自然形態のままのものであり、あらけずりのものではあるが、もっともいきいきとした、もっとも豊富な、もっとも基本的なものである。この点からいえば、それはすべての文学・芸術がはるかに及ばないものであり、あらゆる文学・芸術にとって、くんでもつきず、用いてもなくならない唯一の源である。これが唯一の源であるというのは、この源をのぞいて、第二の源はありえないからである」③と。きわめて明らかなように、労農兵大衆の闘争のなかで試練を経てこそ、創作と芸術のうえですばらしい躍進をとげることができ、文芸という武器でなん千なん億という大衆を教育し、鼓舞して、かれらを社会主義革命と社会主義建設の各戦線でいっそう勇敢に前進させることができるのである。

この文化革命の運動のなかで、京劇が革命的な現代ものを上演しはじめたが、これはきわめて喜ばしい現象である。現代ものを上演することは京劇芸術のちょう落であり、滅亡であると言う者がいる。事実はまさにそれと正反対であって、京劇の革命化、大衆化がはじまったため、革命的な現代もの京劇は文芸界の称賛をあびているばかりでなく、各方面の大衆のかっさいを博している。もとからの京劇愛好者が革命的な現代もの京劇を歓迎しているばかりでなく、以前あまり京劇を見なかった人たちも革命的な現代もの京劇の熱心な観客となっている。こうして、革命的な現代ものの上演により、京劇芸術は新たな生命力をかちとり、新しい広びろとした前途をきりひらいたのである。いうまでもなく、どのようなすぐれた芸術も一朝一夕でできあがるものではない。革命的な現代もの京劇も同様である。われわれはそれが一挙に完全無欠なものに仕あげるようにというようなきびしい要求をすることはできない。またいちぶの出しものがいまのところまだ比較的あらけずりであるとか、あるいは小さな欠点があるとかの理由でそれを軽々しく見すてるべきでもない。正しい政治的方向と革命的な思想内容をもつ出しものにたいしては、われわれはあくまでくいさがるという気魄で、不断の実践のなかで各方面の意見に耳をかたむけ、修正をかさねて、それをしだいに成熟させ、一歩一歩改善し、一歩一歩向上させ、日ましに完全なものに仕上げなければならない。内容もよく、演技もよいすぐれた出しものについては、それを

おしひろめ、りっぱなうえにもりっぱにするという精神で、普及を基礎として向上をはかることが、なおさら必要である。

社会主義の文化革命は、きわめて困難で長期にわたる大きな任務である。各地の党組織と文芸の指導機関はこの仕事を十分重視し、真剣に指導をおこない、この革命運動の健全な発展をうながし、イデオロギーの分野で、計画的に、段階を追って資本主義勢力と封建勢力を徹底的にうちまかし、一掃し、階級闘争、生産闘争、科学実験の三大革命運動における社会主義の文芸の大きな役割をいっそう発揮させなければならない。

注

①②③ 「延安文芸座談会における講話」、『毛沢東選集』中国語版第三巻

京劇芸術発展の新段階

——現代もの京劇競演大会の開幕を祝って

（一九六四年六月六日付『人民日報』社説）

現代もの京劇競演大会が開幕された。一九の省、市、自治区二〇余の劇団の参加するこのたびの競演大会は成績を発表する大会であり、経験を総括し交流する大会である。今回の競演大会は京劇界にとって大きなできごとであり、演劇界ぜんたいにとってもまた大きなできごとである。これは、わが国京劇芸術の発展が新しい段階にふみいったことを示しており、わが国の京劇芸術が社会主義の経済的土台の要求にそって社会主義の新しいものを生みだすことを当面の努力の方向としていることを示している。

京劇はわが国の重要な演劇の一つで、劇団数がもっとも多く、隊伍も最大であり、広はんな大衆からも愛好されている。したがって、文学芸術の社会主義的改造の過程で、どうすれば京劇芸術を社会主義革命と社会主義建設によりよく奉仕させることができるかということは、また格別

重大な意義をもっているのである。

党は演劇芸術にたいして、一貫して「百花斉シク放キ、陳キヲ推シテ新シキヲ出ス」という方針をとっている。この方針は二つの面の要求をふくんでいる。一つは、史的唯物論の観点で伝統的な出しものを整理し、書きあらため、教育的意義をもつ新しい歴史劇をつくることであり、もう一つは、演劇芸術が新しい時代を反映し、労農兵大衆の新しい生活を反映し、内容の改革に照応して演劇の演出形式も適当に革新しなければならないということである。解放いらい、前者の革新の仕事はより多くすすめられ、めざましい成果をあげたが、後者の革新の仕事は比較的立ちおくれており、京劇のそれは他の演劇にくらべてはるかに劣っている。

どうして京劇は長年らいこの面でずっと他の演劇より立ちおくれていたのだろうか？

京劇には一連の比較的固定した、演出形式が形づくられており、そのため現代の生活を表現するのに他の演劇より若干困難をともなうことは否定できない。しかし、これらの困難は完全に克服できるものである。京劇の革新をさまたげているもっとも主要な原因は、やはりふるいものにしがみつく保守的な思想がたたっていることである。京劇芸術工作者のなかにも京劇愛好者のなかにもつぎのような人がいる。かれらは、京劇芸術を、指一本ふれることも許されない骨董とみなし、京劇はぜったいに現代ものを上演してはならず、もし現代ものを上演すれば、京劇芸術を

だいなしにしてしまうだろうと思いこんでいる。これらの人びとは実際には、京劇と京劇芸術工作者を歴史生活のふるいトリデのなかに封じこめ、完全に京劇と京劇芸術工作者から現実の生活を反映する権利をとりあげ、京劇と京劇芸術工作者がよりよく社会主義と労農兵に奉仕するのをさまたげることをねらっているのである。

京劇芸術は革新する必要があるかどうか？　革新することができるかどうか？　京劇が現代ものを上演すればこの伝統的な出しものをだいなしにすることになるのか、それともこの伝統的な出しものを発展させることになるのか？　京劇芸術工作者は自分じしんの実践によって力づよい回答をあたえている。

京劇芸術の革新は、時代と大衆の要求であり、同時に京劇じしんの発展の要求をも反映している。いかなる芸術も、もし休みなく前進する時代の要求に応じることができなければ、かならず徐々に自己の生命力をうしない、滅亡に向かうものである。芸術発展史上では、こうした例はしばしば見られることで、めずらしいことではない。もしも、京劇がふるい時代の人物しか演ずることができず、こんにちの人物を演ずることができなければ、また支配階級の王侯将相、才子佳人しか演ずることができず、あるいはせいぜいふるい時代の人民大衆を演ずるだけで、新しい時代と新しい社会の主人公である労農兵を演ずることができず、京劇の舞台が永遠にふるい時代の

人物や死んだ人物で占められるのにまかしておけば、この種の芸術が力づよく社会主義の政治・経済に奉仕し、社会主義、共産主義思想で人民を教育するということがはなはだむずかしくなるだけでなく、新しい社会の勤労人民の思想、感情を表現することができないために、必然的にしだいに大衆から浮きあがり、ちょう落の道をたどることになるであろう。したがって、京劇芸術は、ただたえまなく革新し、自分じしんが現代の生活を反映する能力をそなえてのみ、はじめて発展のための広びろとした道を切りひらくことができるのである。

京劇はたしかに、一連の比較的高度に発展し、また比較的固定した演出形式を形づくっているが、これはけっして根拠なしにつくられたものではなく、歴代の京劇芸術家によって昔の生活のなかから徐々にねりあげられたものである。京劇が昔の生活を表現するのに適した芸術形式をさがしあてた以上、どうして現代生活を反映するときに、それにふさわしい新しい表現形式をさがしだすことができないのだろうか？　現に、京劇の舞台にはすぐれた創作が少なからず現われている。それらは新しい時代、新しい生活を反映し、新しい英雄的人物をつくりあげ、革命的人民の思想、感情を表わすうえで成功しているだけでなく、伝統芸術の基礎の上に、新しい内容に照応した新しい表現形式を創造しはじめている。

京劇は歴史をテーマとしたものを表現することにおいては比較的長じているが、その発展の途

上でのいろいろな原因から、かつて比較的長い期間、生活から遊離していたため、たとえ歴史をテーマにしたものを表現する場合でも、他の地方劇にくらべ、しばしばいきいきと躍動した生活の息吹きに欠けており、凝結・硬化した傾向を示していることは見てとるべきである。京劇が現代ものを上演し、現代の生活を表現することは、京劇工作者が現代の生活との結びつきをつよめずにいられないように促している。これは京劇の内容を豊かにし、広げているだけでなく、かならずそれ相応に生活を表現する能力を豊かにし、つよめるであろう。現代ものの創作と演出は、反面また歴史生活をテーマとする京劇の創作能力と演出能力の向上にかならず役立つであろう。これが京劇の伝統を破壊するのではなく、まさに京劇の伝統を発展させるものであることは明らかである。

ところが、京劇のようにふるい演劇は、いったいどうすればよりよく現代をテーマとした新しい京劇をつくりだすことができるのだろうか？　この仕事は、いまのところはじまったばかりで、経験の蓄積が少く、京劇芸術工作者がひきつづき大きな労力をはらい、多方面にわたる試みと探索をおこなうよう切実に求めている。現代ものを演出する京劇の経験から見れば、京劇が現代ものをりっぱに演出するためには、大胆な革新と伝統の継承とが互いに結びつかなければならない。これはつまり、一方では生活から出発して、新しい生活を表わし、新しい人物をつくりだ

す必要にもとづいて新しい表現形式を創造すべきであって、生活をふるい形式と折り合わせたりしてはならず、生活の真実をそこなったりしてはならない。いま一方ではまた、京劇芸術の特徴を重視し、継承し、大衆の好みや習慣を考慮にいれ、伝統芸術のなかからとりいれることのできるものを批判的に運用し、京劇の特色を保持するよう注意しなければならない。こうすることによってはじめて、現代の生活をありのままに反映すると同時に、京劇の特徴を失わないすぐれた出しものをじょうずに創作することができる。

現在、全国各地で現代もの京劇を上演しようという気運が高まりつつある。これはひじょうに喜ばしい現象である。京劇芸術工作者はひきつづき大きな意気ごみをもって、現代もの京劇のいちだんの繁栄と発展をかちとらなければならない。この目的を達するためには、きびしく、真剣な態度をとり、現代ものの思想性と芸術性をたえず高めるよう心がけ、おざなりな仕事ぶりや無責任な態度に反対しなければならない。こうしてはじめて現代もの京劇は真に陣地を占領することができ、大衆のあいだで威信を確立することができるのである。

このようなむずかしい任務を完遂するうえで、もっとも重要なカギは、京劇芸術工作者が自己改造をつよめ、自分じしんの革命化をつよめることである。京劇芸術工作者は、マルクス・レーニン主義と毛沢東同志の著作の学習にはげみ、自己の政治的、思想的水準をたかめ、生活からは

なれ、大衆から遊離した欠陥を克服するように努力し、決意して生活のなかに深くはいり、大衆のなかに深くはいり、生活に学び、大衆に学び、自己の思想、感情を改造しなければならない。舞台で新しい英雄的人物を演じ、うたいあげようとするのに、かれらを知らなかったり、かれらを理解しなかったり、かれらと結びつかなかったり、かれらの烈火のような闘争に参加しなかったりしているのでは、かれらの思想、感情を深く体得することができず、したがってまた、芸術的魅力ゆたかにかれらの英雄的な形象をつくりだすことは不可能である。このことはまた、現代もの京劇を上演してこそ、京劇芸術工作者が大衆のなかに深くはいり、思想改造をおしすすめる効果的な原動力であるということをものがたっている。現在、程度の差こそあれ大衆の生活と闘争に参加している京劇芸術工作者の数は少なくない。これは、かれらがよりよく現代の人物の精神と気質を演ずるようにしているだけでなく、かれら自身の思想、感情をいっそう革命化し大衆化するのを促している。

京劇は現代ものを上演するうえで、すでに初歩的な成果をおさめているが、これは京劇の社会主義的改造のほんの第一歩にすぎず、前進途上で、たえまない真剣な探索と実践によってはじめて徐々に解決しうる芸術創作上のさまざまな問題にぶつかるだけでなく、思想上の障害にもぶつかるし、いろいろな口実をつかって妨害したり反対したりする人もいよう。これらの人びとは、

京劇や京劇芸術工作者を「擁護する」という名目のもとに、実際には京劇と京劇芸術工作者の革命化をさまたげ、京劇を滅ぼそうとしているのである。これは認識上の問題でもあるが、同時に演劇の分野における階級闘争の反映でもある。最近、帝国主義者も現代修正主義者もわれわれの現代ものをさかんに攻撃し中傷しているが、このことはほかでもなく、かれらが社会主義の演劇の威力をひじょうに恐れていることを反映している。かれらがわれわれに攻撃をくわえるのは、われわれの仕事がうまくいっており、そして正しいものであることを裏書きしている。われわれはどうしても現代もの京劇を上演するという正しい方向を堅持し、不撓不屈の信念と勇気をもって、社会主義時代の新しい京劇を創造しなければならない。

今回の現代もの京劇競演大会は、京劇芸術工作者が方向をいちだんとはっきりさせ、認識をたかめ、現代ものの上演の決心をかためる、真剣に経験を交流し総括するのに役立つであろう。これは現代ものの創作にも、京劇芸術のいっそうの革新にも、また京劇芸術工作者のいっそうの革命化にたいしても、大きな促進作用をおよぼすであろう。京劇芸術の工作者は、労農兵に奉仕し、社会主義に奉仕するという党の文芸方針を誠心誠意実践し、真剣に「百花斉シク放キ、陳キヲ推シテ新シキヲ出ス」という党の演劇方針をつらぬきさえすれば、長い伝統をほこるわが国の京劇芸術をいっそうさんらんと輝かせ、いっそう繁栄した新しい段階におしすすめ、京劇芸術が現代

の生活を反映する面においても、過去の歴史をあらわす面においても、異彩を放つことができる、とわれわれは確信する。京劇芸術の前途はかぎりない光明にみちている。今回の競演大会の成功を熱烈に祝おうではないか！

文芸戦線における社会主義革命を最後までおしすすめよう

——成功裏に閉幕した現代もの京劇競演大会を祝って

（一九六四年八月一日付『人民日報』社説）

現代もの京劇競演大会は、京劇芸術の大革命であり、わが国演劇史上にかがやかしい一ページをしるした。この大革命は京劇を労農兵に奉仕させ、社会主義に奉仕させるまったく新しい段階におしすすめた。今回の競演大会の成功は、わが国の文学・芸術戦線における社会主義革命の偉大な戦果であり、わが国文学・芸術の革命化をよりいっそう促進し、文芸戦線での社会主義革命を最後までおしすすめるであろう。

今回の競演大会では、革命的な思想内容と芸術的によく洗練された演出をかねそなえた数多くの革命的な現代もの京劇が、広はんな観客から熱烈な歓迎をうけ、こころからの称賛をあびた。

そしてだれもが一様に「収獲が意外に大きかった」のに目をみはらせた。京劇が改革できるのを信じなかった多くの人は疑惑をとき、京劇の改革に賛成し擁護した人びとはいちだんとその確信を深めた。革命的な現代もの京劇がおさめた成果は、帝国主義者と現代修正主義者の恥知らずな中傷をはねかえし、かれらにみごとな平手うちをくらわせた。

社会主義の舞台は社会主義の重要な思想的陣地である。社会主義の舞台で封建階級の思想、ブルジョアジーの思想を宣伝するか、それともプロレタリアートの思想を宣伝するかということは、資本主義と社会主義の二つの道のたたかいである。わが国の社会主義的改造は、所有制の面ではすでに基本的な完成をみた。だが、上部構造としてのイデオロギーの面では、社会主義と資本主義のどちらが勝ち、どちらが負けるかという闘争は、まだ最終的に解決されていない。うちまかされた反動階級はけっして滅亡に甘んぜず、つねに百方手をつくしてプロレタリアートと芸術の舞台を奪いあい、思想的陣地を奪いあい、これによってかれらの思想的影響をかため、拡大し、かれらの「失われた天国」をとりもどそうと夢みている。したがって、京劇は革命すべきかどうか、革命的な現代ものを上演するべきかどうかということは、イデオロギーの面における激烈な階級闘争である。この階級闘争において、成功裏におわった革命的な現代もの京劇の上演は、とくに重大な意義をもっているといわねばならない。

このたびの競演大会によって、京劇工作者および文学・芸術工作者ぜんたいにとっていくつかの根本的な問題が明らかになった。

第一に、京劇はいったいだれに奉仕するのかという問題である。社会主義に奉仕するのか、それとも封建主義、資本主義に奉仕するのか。九〇何パーセントの勤労人民に奉仕するのか、それとも少数の「老若遺臣」にだけ奉仕するのか。新時代の主人公である労農兵を表現するのか、それとも旧時代の主人公である帝王将相、才子佳人を表現するのか。社会主義革命と社会主義建設に有利な劇を上演するのか、それとも封建主義、資本主義に有利な劇を上演するのか。これはもっとも根本的な問題である。今回の競演大会はつぎのことを物語っている。つまりプロレタリアートの京劇と文学・芸術ぜんたいは、プロレタリアートの思想的陣地を固め、搾取階級の思想的影響を徹底的にとりのぞくことにつとめ、新しい時代を表現し、労農兵を表現することにつとめ、広はんな人民にたいしてたえず社会主義、共産主義の思想教育をすすめ、広はんな勤労人民の労働意欲をふるいたたせ、かれらの社会主義革命と社会主義建設の闘志をはげますことにつとめてこそ、はじめてプロレタリアートの力づよい武器になることができるし、真に労農兵に奉仕し、社会主義に奉仕することができるのである。

第二に、京劇の芸術形式の改革の問題である。新しい内容の要求に応じて、大胆に革新をおこ

ない、それによって京劇の表現能力をたえず広げてゆくのか、それともふるいしきたりにしがみつき、現状維持をつづけ、しだいに自らちょう落し、ひいては滅亡するにまかすのか。これはいま一つの根本的な問題である。京劇の内容は革命的な思想内容でなければならない。京劇特有の芸術的風格は革命的な内容と統一されなければならない。京劇の改革をこころざした人は、社会主義の新しい内容が適当な民族的芸術形式をかならず捜しあてること、そして京劇というこの伝統的な芸術形式が改造されなければ、新しい思想内容を巧みに表現することは不可能だ、ということを早くから切実に感じていた。京劇のように広はんな大衆のあいだで長い歴史をもち、深く根をおろしている伝統芸術を、新しい内容に適応させ、新しい生命をもたせるように改造するということは、たしかにわが国文学・芸術の社会主義的改造における重大な意義をもつことがらである。現代もの京劇競演大会は、この面で豊富な経験をかちとった。観客から熱烈な歓迎をうけた多くのすぐれた出しものは、社会主義時代の新しい生活、新しい思想を表わしているだけでなく、芸術形式のうえでも程度の差こそあれ、新しい生活、新しい思想にふさわしい革新がなされたのである。しかも、こうした革新は、べつに京劇の伝統をたちきったのでもなければ、京劇の特徴を破壊したのでもなく、反対に京劇の伝統をうけつぎ、京劇の特徴を発展させたのである。うけつぎながら革新をおこない、京劇芸術の特徴をいかし、京劇芸術の風格をたもつことは、民

族形式を改造して、それを社会主義の新しい内容に照応させる正しい道である。

第三に、京劇工作者の改造の問題である。京劇の内容と形式を革新するうえでカギとなる問題は、京劇工作者の改造の問題である。全国的な演劇改革のなかで、京劇の改革は比較的緩慢であり、またかなり立ちおくれている。京劇の改革にたいして、じゃまをする力が京劇の指導者、京劇工作者、京劇愛好者のなかにかなりつよい。その原因は多方面にわたっているが、もっとも主要なのは、京劇工作者が長期にわたり労農兵から遊離し、思想、感情の面でふるいものがわりあい多く、また比較的根深いことで、ブルジョア思想があるだけでなく、封建思想とおくれた習慣もあることである。ふるい思想とふるい習慣がかなりひどい人は、なかなか京劇の革命派になれない。京劇工作者は労農兵と結びつき、自己の思想、感情を改造することによってのみ、京劇芸術を適確に運用し、革新して、労農兵を表現し、社会主義に奉仕することができるのである。こんどの競演大会で、およそ革命的な思想内容と芸術的に洗練された演出をかねそなえた出しものはすべて、京劇工作者が労農兵と結びついた結果であり、烈火のような闘争のなかに深くはいった結果である。

社会主義の京劇工作者は、何よりもまず社会主義の革命戦士である。思想改造をおこなわなければ、革命的な思想、感情をもつことができない。当然のことながら、革命的作品を書くことも

できないし、革命的な劇を上演することもできない。京劇工作者はふつうの革命戦士ではなく、自分の芸術で大衆を教育し、大衆に感銘をあたえる教育者である。教育者はまず教育をうけなければならないし、まず自分が革命的な思想、感情をそなえていなければならない。そうしてこそはじめて、革命的な思想、感情で人を教育することができるのである。八年前、毛沢東同志は中国共産党全国宣伝工作会議の席上、知識人の思想改造の重要性をとくに強調してつぎのように語った。「もし人を教える者はもはや教育をうける必要がなく、もはや学習する必要がないと考え、社会主義的改造は、ただ他人を改造し、地主、資本家を改造し、個人経営の生産者を改造するだけで、知識人を改造する必要がないと考えるならば、それは誤りである。知識人も改造しなければならない。基本的な立場がまだ変わっていない人たちが改造しなければならないばかりでなく、すべての人がみな学習すべきであり、みな改造すべきである。」

京劇工作者で、もしプロレタリアートの革命的文芸戦士になろうと決心するならだれでも、革命的実践を通じて、生活から思想面にいたるまで、広はんな労農大衆と結びつき、自分の立場、観点、思想、感情をまじめに改造しなければならない。このようにしなければ、立脚点を徐々に労農兵の側、プロレタリアートの側に移すことができない。このようにしなければ、舞台の上と下の生活や思想の一致しない二重人格という奇怪な現象を克服することができないし、革命的精

神と革命的感情をもつことができない。同時に、京劇芸術はその他の芸術と同様、人民の生活が革命的芸術家の頭脳に反映して生まれたものであり、労農兵大衆の労働と闘争は、あらゆる文学・芸術のくみつくすことのできない唯一の源泉である。生活に深くはいらず、大衆のなかに深くはいってゆかなければ、現実を深く反映した革命的な文芸をつくりだすことは不可能である。したがって、京劇工作者たちはその他の文芸工作者と同様、大きな決心をもって、何回かにわけて労農兵大衆のなかにはいり、烈火のような闘争のなかにとびこみ、大衆闘争のなかで自分の思想と芸術をきたえ、改造しなければならない。「革命的な劇を演ずるものは、まず革命家たれ」これは広はんな京劇工作者が今回の競演大会の中からくみとったもっとも深刻な体験である。

革命的な現代もの京劇の上演は、深遠な意義をもっている。それはわが国の演劇革命を促進しただけでなく、わが国の文学・芸術戦線における社会主義革命をよりいっそう展開する上でも、一つのりっぱな手本となった。わが国の文学・芸術の諸分野には、封建主義、資本主義の伝統的勢力が根深くのこっている。大多数の文学・芸術工作者は、長期にわたってこうした文化的伝統の影響を受けているので、思想改造の重要性について認識が欠けている。たとえ社会主義制度のもとで育った若い世代であっても、もし労農兵のあいだで生活しなければ、やはり「象牙の塔」

のなかで方向をみうしなってしまうであろう。まさにこうした原因から、ついさきごろまで、封建主義思想、資本主義思想を宣伝した怪談ものやその他の悪い劇が、こともあろうに社会主義の舞台でわがものがおにふるまっていたのである。いちぶの新聞・雑誌もいわゆる「お化け無害論」といったものまで宣伝した。資本主義と封建勢力が社会主義にたいして気ちがいじみた攻撃にでたとき、いちぶの文学・芸術工作者は奮起してこれにあたる必要を感じなかったばかりか、逆に、いわゆる芸術鑑賞というものに陶酔し、これを大いに称賛した。またあるいちぶの文学・芸術工作者は、長期間労農兵から遠ざかり、烈火のような闘争から遠ざかって、勤労人民の天地をもくつがえすような創造にたいしてそしらぬふりをし、なんらの関心をも寄せなかった。ごくわずかではあるが、すでに腐敗しはじめていた者すらいる。社会主義制度のもとで生活していながら、思想感情、芸術創作、芸術趣味が封建主義、資本主義時代のままでいるというような文学・芸術工作者は、生まれかわったように、徹底的に改造しなければ、どうして労農兵に奉仕し、社会主義に奉仕することができようか。文学・芸術戦線ぜんたいにわたって封建主義、資本主義およびありとあらゆる妖怪へんげをきれいさっぱりととりのぞかなければならないが、そのためにはなによりもまず文芸戦士の一人ひとりが実際からかけはなれ、大衆から遊離していたこれまでの自分の態度を断固として徹底的に改めなければならない。このたび、革命的京劇工作者

によってひらかれた京劇改革への道は、まさに革命的文芸家の隊伍ぜんたいが情熱をこめてこれにあたり、最後まで堅持しなければならない道である。

革命的現代もの京劇の上演は、まだ文学・芸術の革命化のほんの手はじめにすぎず、困難な任務がまだまだのこされているのである。しかも人間の思想改造は、さらに長期にわたる、複雑で困難にみちたものである。したがって、かならず文学者、芸術家の隊伍の思想・政治工作をつよめ、文学・芸術戦線でプロレタリア思想をさかんにし、ブルジョア思想を一掃する思想闘争を展開し、いたるところで批判と自己批判の精神を大いに発揚し、知識人の温情主義、妥協的態度や自分を許すような悪癖に反対しなければならない。同志のあやまちにたいして、「温情」を示すならば、それは同志の改造の助けにならず、終極的には同志にたいするもっとも無情な仕打ちになるであろう。ブルジョア思想にたいして妥協的態度をとるならば、同志がプロレタリア思想で自己を改造し、武装するのを助けることができず、終極的には二つのことなった思想が全然妥協しえなくなるのである。自分に厳格でなく、自分を許すようなことは、とりもなおさず、進歩を求めず、落後に甘んじ、ついにはもっと許しがたいハメに陥ることである。これらすべては、同志をそこない、自己をそこなうだけでなく、党の事業に損害をあたえ、党と人民の革命的利益に違反するものである。革命的な文学・芸術工作者はかならずきびしく厳格な態度でこの問題にあ

たらなければならない。

現代もの京劇の上演は、一つの大革命である。だれが革命をもっとも憎んでいるのか。国内外の反動派である。帝国主義と現代修正主義の旦那がたは、もともと中国の京劇芸術についてたいした知識をもたず、現代もの京劇をみたことさえないにもかかわらず、京劇が革命をするときくと、矢も楯もたまらず自分を京劇という伝統芸術の保護者のようによそおい、京劇の革命運動に気ちがいじみた攻撃をくわえた。かれらのほこさきは、ほかでもなく京劇の思想内容の変化、芸術形式の革新と人間の改造という三つの面に集中的に向けられているのである。かれらがなによりも恐れているのは、まさに京劇が労農兵を表現し、社会主義に奉仕することであり、ふるい京劇が力づよい新しい芸術的武器に改造されることであり、京劇工作者が労農兵と一体になって、革命的な文芸戦士になることである。一口でいえば、社会主義的改造を経た京劇は、もはや少数の人に奉仕するものでなくなり、打倒された反動階級の「平和的転化」陰謀のための道具になることが不可能になったということである。これがつまり、なぜかれらが革命的な現代もの京劇をこのようにむきになって攻撃するかという根本的な原因である。

「敵の反対にあうことはよいことで、わるいことではない。」これは毛沢東同志の名言である。二十五年まえ、毛沢東同志はこう言った。「わたしはこう考える。われわれにとっては、ある個人、ある党、ある軍隊あるいはある学校が、もし敵に反対されないなら、それこそよくないことで、きっと敵と野合しているのである。もし敵に反対されるなら、それこそよいことで、われわれが敵と一線をきっぱり画したことを立証しているのである。もし敵がやっきになってわれわれに反対し、われわれのことをメチャクチャで、全然なっていないとけなせば、それこそなおさらよいことで、われわれが敵ときっぱりと一線を画しているだけでなく、われわれの仕事がりっぱな成績をあげていることを立証しているのである」と。革命的な現代もの京劇が帝国主義と現代修正主義者の気ちがいじみた反対にあっていることは、つぎの真理をたいへんよく説明している。つまり、かれらの恐れているものが、まさにわれわれの喜びとしているものであり、かれらが口ぎたなくののしればののしるほど、われわれの演劇革命が正しく、みごとにすすめられていることをますます立証しているのである。

革命的な現代もの京劇上演が成功裏に閉幕したことを祝賀するにあたって、われわれは、京劇と京劇工作者、文学・芸術と文学・芸術工作者の革命化に心からの期待と確信をいだくものである。すべての有為の革命的な文学・芸術工作者は満腔の熱情をこめ、意気はつらつとこの革命のなかに身を投じ、文芸戦線での社会主義革命をよりいっそう深くおしすすめ、社会主義、共産主義の思想的陣地を強化し、発展させるために、自分のすべての力をささげなければならない。あ

る人は、京劇が革命的な現代ものを上演するのは一陣の風みたいなものである、と言っている。たしかにこれは風である。だが、一陣ではなくて、永遠に吹きすさぶ革命の烈風である。この風は吹けば吹くほどますます大きくなり、秋風が落葉をさらうように、搾取階級およびその思想的影響をのこらず墓穴に吹きこんでしまうだろう。この風はまた春が大地にもどってくるときの東風のように、社会主義の新事物を吹きつけ、すさまじい勢いでこれを発展させ、社会主義の文学・芸術の百花をいっそう栄えさせ、いっそうさかんに咲かせるであろう。

毛沢東文芸思想の革命の大旗を高くかかげ、勇敢に前進しようではないか！

文化戦線における大革命

1964年 初版発行　　定価80円

出版者　外文出版社
（北京阜成門外百万莊）

発行者　中国国際書店
（北京 P. O. Box 399）

編号：（日）3050—1040　　3—J—675P
00067

▲ 陶　鋳　前進する人民公社

——広東省農村人民公社五年らいの基本的総括

B 6判　40ページ　定価30円

▲ 胡耀邦　わが国青年の
革命化のためにたたかおう

——1964年6月11日中国共産主義青年団
第9回全国代表大会における活動報告

B 6判　59ページ　定価40円

出版者　北京　外文出版社
発行者　北京　中国国際書店